# 瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告

# ―― 大　萩　遺　跡 ――

# （2）

1 9 7 5

宮 崎 県 教 育 委 員 会

# 例　　言

1　本調査報告書は、県西諸県農林振興局の瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴なう事前緊急調査として宮崎県教育委員会が昭和50年10月22日～11月12日に実施した西諸県郡野尻町大字三ケ野山大萩遺跡（G・H・I地区）の報告書である。

2　本稿の執筆は、その発掘にあたった調査員があたり、その報告文の末尾にそれぞれの文責名を記した。

3　掲載の実測図は、田中、茂山、野間、岩永が担当した。

4　作業現場での写真撮影は調査員全員があたり、遺物の撮影は、田中、茂山があたった。

5　本調査にあたっての調査計画は、県教育委員会文化課課長補佐寺原俊文、同主事岩永哲夫があたった。報告書の編集発行についても文化課が中心となり、調査員の助力を得て行なった。

調査関係者

調査主体・宮崎県教育委員会

| | | |
|---|---|---|
| 教育長 | | 穂積正晴 |
| 文化課長 | | 児玉次夫 |

調査員

| | |
|---|---|
| 石川恒太郎 | (県文化財専門委員) |
| 日高正晴 | ( 〃 ) |
| 田中茂 | (県総合博物館主任) |
| 茂山護 | ( 〃 主事) |
| 野間重孝 | (宮崎市教育委員会 主事) |
| 面高哲郎 | (宮崎市立檍小教諭) |

庶務会計

| | |
|---|---|
| 庶務係長 | 広田陽一郎 |
| 〃 主事 | 矢野剛 |

調査担当

| | |
|---|---|
| 文化課長補佐 | 寺原俊文 |
| 〃 主事 | 岩永哲夫 |

調査協力者

野尻町教育委員会

県西諸県農林振興局

遺跡出土の木材炭化物の樹種鑑定は宮崎大学農学部講師大塚誠氏にお願いした。

# 本 文 目 次


Ⅰ　発掘調査の経過 …… (1)

Ⅱ　位置と環境 …… (2)

Ⅲ　G 地 区 …… (4)

1　調査区の概要 …… (4)

2　1号住居址 …… (6)

3　2号住居址 …… (8)

4　3号遺構 …… (9)

5　4号住居址 …… (10)

6　5号住居址 …… (12)

7　住居址木材炭化物の樹種 …… (15)

Ⅳ　H 地 区 …… (19)

1　調査区の概要 …… (19)

2　遺構及び遺物 …… (20)

Ⅴ　I 地 区 …… (22)

調査の概要 …… (22)

Ⅵ　結　語 …… (23)

# 挿　図　目　次


第 1 図　大萩遺跡位置図

第 2 図　G地区全体図 …… (27)

第 3 図　〃　1号住居址実測図 …… (28)

第 4 図　〃　2号住居址実測図 …… (29)

第 5 図　〃　3号遺構実測図 …… (30)

第 6 図　〃　4号住居址実測図 …… (31)

第 7 図　〃　5号住居址実測図 …… (32)

第 8 図　〃　1・2号住居址出土土器実測図 …… (33)

第 9 図　〃　4号住居址出土土器実測図(1) …… (34)

第 10 図　〃　〃　(2) …… (35)

第 11 図　〃　5号住居址出土土器実測図 …… (36)

第 12 図　〃　1・2・4号住居址出土石器実測図 …… (37)

第 13 図　〃　5号住居址出土石器実測図 …… (38)

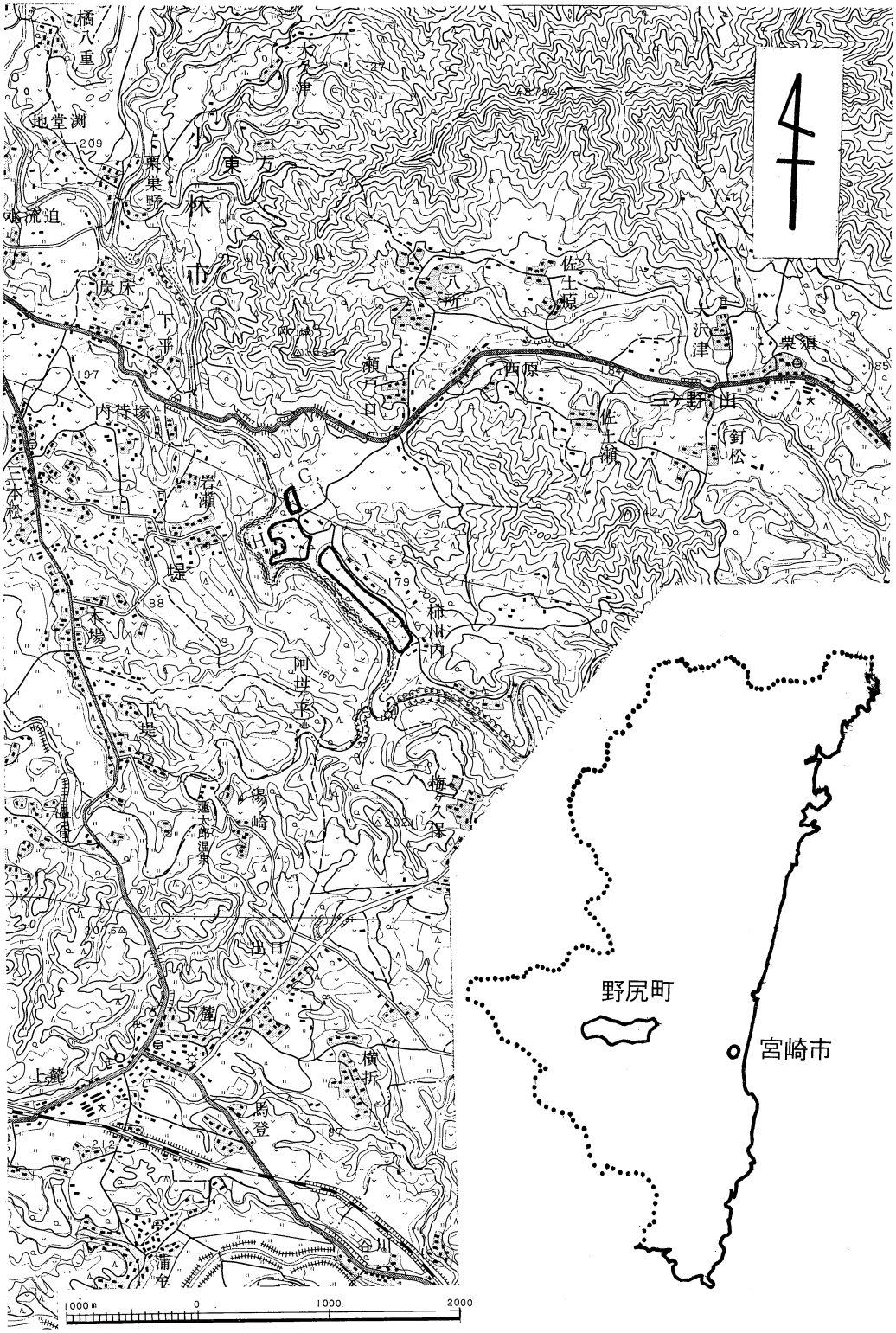
第 14 図　H地区平面図 …… (39)

第 15 図　〃　遺構実測図 …… (40)

第 16 図　〃　出土遺物実測図 …… (41)

# 図　版　目　次


図　版　1　G地区遠景 …… (43)
図　版　2　〃　発掘状景 …… (43)
図　版　3　〃　1号住居址 …… (44)
図　版　4　〃　2号住居址、3号遺構 …… (44)
図　版　5　〃　4号住居址 …… (45)
図　版　6　〃　〃　(清掃後) …… (45)
図　版　7　〃　5号住居址 …… (46)
図　版　8　〃　〃　遺物出土状況 …… (47)
図　版　9　〃　1号住居址土器 …… (48)
図　版　10　〃　4号住居址土器 (1) …… (49)
図　版　11　〃　〃　(2) …… (50)
図　版　12　〃　〃　(3) …… (51)
図　版　13　〃　5号住居址土器 (1) …… (52)
図　版　14　〃　〃　(2) …… (53)
図　版　15　〃　2・5号住居址土器 …… (54)
図　版　16　〃　〃　石器 …… (55)
図　版　17　〃　1・4号住居址石器、炭化種子 …… (56)
図　版　18　H地区発掘状景及び1号遺構 …… (57)




第1図 大萩遺跡位置図(アルファベット地区名)

# Ⅰ　発掘調査の経過

瀬戸ノ口地区における特殊農地保全整備事業は、昭和48年度から続けられているが、それに伴なう緊急発掘調査も第三次をかぞえ、既にA～F地区の調査を実施してきた。50年度は、引き続きG・H・I・Jの四地区を対象にしたが、本調査に先だち、分布調査を昭和50年9月4・5の両日実施した。その結果、各地区にわずかながら土器片散布がみられたが、中でもG・H地区が数量的にも多く、遺跡存在の可能性が強く感じられたので、この地区を重点的に発掘調査することにした。

本調査は昭和50年10月22日から11月12日まで実施した。以下、日を追って主な事項を述べることにする。

22日G地区中央が里芋畑でまだ収穫が終ってなかったので、この西方に2m幅のトレンチを設定し（第1T・2T）、層位確認を行なった。

翌23日からG・H2班に分かれ調査溝を設定し、試掘を行なったが、G地区では第3Tに住居址の一部とみられる遺構が現われ、確認するために2m×10mのトレンチ拡張を行なった（1号住居址）。H地区では表土下50～60cmで年代不明の住居遺構の一部と考えられる敷石築土の遺構が方3mの範囲にあるのを検出したが、年代推定の確認となるものは発見できなかった。

25日、G地区1号址の北方4Tで2号住居址を発見し、周囲の拡張を行なった。H地区ではその後、遺構の発見もなく、同時にI地区の試掘を行なったが、数点の土器片を検出したのみであった。

26日からG地区を中心に遺構調査に専念することになり、I地区からG地区に移動し、1号址の調査、実測をはじめるとともに、2号址の範囲確認作業を実施した。

27日、2号址の表面清掃の結果、更に北東端に接続して別の竪穴遺構が見られたので、トレンチを北東へ延長していった（3号址）。1号址中央に2個のピットを確認し、2号址調査で木炭の残存が多く、堀り進むにつれて、椎があらわれはじめた。

28日、ブルドーザーによって地表下約60cmの表土を剝ぎ取り、4mのグリッド設定を行なった。縦軸をA・B・C…に、横軸を1・2・3…と区分することにした。この後、グリッド内遺構検出作業につとめ、B－4・5区にかけて竪穴遺構の一部を検出した（4号住居址）。

30日以後、遺構検出につとめたが、土器片数点の出土のみで何等発見できず、調査員は既検出遺構の調査に集中した。11月2～3日は休日として、翌4日、K--3′区でまとまった土器片群を発見したが、遺構は見つからなかった（後の5号住居址西側）。

5日までにG地区の遺構検出作業を終え、6日から（6日雨のため実際は7日から）4号址に若干名を残し、再びH地区へ移動することになった。8日、H地区の農道突き当たり右側のトレンチに方形プランがあらわれはじめ、H地区1号住居址とした。本日より平板測量をはじめた。9日、G地区の中央里芋収穫が終ったので、第6～10Tを入れ調査したが、遺構は何も発見できなかった。10日、G地区K--3′区の土器群を整理していくと、東方下層に住居址と見られる遺構があらわれ、5号住居址とした。H地区では1号址に後世遺構の切り込みがみられた。11、12の両日は、4・5号址の調査整理に集中した。I・J地区は末調査の部分が多かったが、整備作業に慎重を期し、土器等検出の際は連絡をしてもらうことにして調査を終了したのである。

（岩永哲夫）

# Ⅱ 位置と環境

大萩台地は、西諸県郡野尻町大字三ケ野山に属し、今も「夷守」の地名が残る小林と相接している。台地の西側から南側にかけての直下には、古く日本書紀景行天皇十八年の春三月の条にその名が見える岩瀬川が流れている。

この台地は、シラスを基盤とし、3段から成っている。まず、最上段（3段目）は大萩台地の主要部を占め、字瀬戸ノ口から字岩瀬口に至る国道268号線沿いに開けた標高195m～201mの広大な畑地でその位置と環境の概要については昨年度の報告書で紹介している。註①

これまでの調査で、この上段の台地からは、弥生終末期の土壙墓17基以上、同時期の住居址1基、地下式横穴33基が発見されている。このうち、土壙墓の4号、6号には、ガラス小玉、5号には貝釧が副葬されていた。また、土壙墓に供献されていた多量の土器は、免田式土器、安国寺式系土器を主とする東九州第5様式の土器群であったが、両者が全く共伴の状態で出土したことは免田式土器の消長を知る上からも興味ある発見であった。地下式横穴群では、昭和48年度に調査したB区で県指定古墳（円墳）の直下から地下式横穴が発見され、封土をもつ地下式横穴研究に貴重は資料を提供した。

さらに、昭和49年度調査のF地点からは、地下式横穴としては初の木棺を検出し、注目された。

このような遺構と遺物を内包した最上段の台地から岩瀬川寄りに1段下った平地が中段（2段目）の台地で本年度の調査対象地域である。この台地は、河岸段丘で岩瀬川に沿うて形成され、小谷の切りこみで大きく4区に分けることができる。調査の便宜上この4か所を昨年度の地区名称に続けて上流沿いからG.H.I.J区と名付けた。

G区の台地は、国道268号線から分岐し、柿川内に通じる町道が前記上段の台地を通り過ぎゆるやかな坂道を下り終えて若干右へ寄った地点、つまり西柿川内集落のはずれから岩瀬口に向う道路沿いの畑地である。南北約190m、東西約170mの広さで、標高は、西側が若干高く、172m、東側の上段に続く傾斜面寄りがやや低く170m、岩瀬川水面からの比高約30mである。この台地のうち今回の調査は、道路沿いの線から西側、岩瀬川寄りにかけての地域でこれをG区とした。

次のH区は、G区から谷間一つへだてた南方に位置し、東西320m、南北430mの規模でこのうち北部は西柿川内の集落になっているが大部分は畑地である。標高168m～170mでG区同様、川寄りが若干高くなっている。この大萩台地は、どの地点でも霧島を一望のもとに見ることができるが、とりわけこのH区からの眺望はすばらしく全く景勝の地といえる。

I区は、H区からやはり谷一つへだてた東側に東西にかけて細長く長方形状に伸びた畑地で、その広さは、東西700m、南北150mである。標高は、上流沿いで170m、東側下流沿いが166m～168mと若干下っている。

J区は、柿川内に属し、I区から谷をへだてた東南側に位置する畑地で台地の形状は岩瀬川流れに沿うて大きく南方へ曲折し、への字形を呈している。標高は164m～166mで上流沿いがやや高くなっていた。なお、表面採集の際、このJ区からは、遺物は発見されなかった。

以上、本年度の調査対象地になっている中段台地の地形等を概観したが、この対象地の下にもう1段、台地が見られる。この台地は、中段のように川の流域に沿うて一様に形成されたものではなく、曲

折部に見られるだけの狭隘なものである。最も新しい河岸段丘といえよう。標高は約150$m$で岩瀬川の水面からの比高約10$m$で灌漑しやすいので水田に利用されている。今のところ遺物は発見されていない。（田中茂）

（註）田中茂「遺跡の位置と環境」２・３ページ＜大萩遺跡(1)＞（宮崎県教育委員会　昭.50.3.31）所収

# Ⅲ G 地 区

## 1. 調査区の概要

G区は大萩台地の西縁に位置しており、その西から北にかけては岩瀬川が北から西をめぐって流れており、東方には道路が北から南に通じていて、南方は1段低い林であるのでほぼ長方形に近い形の畑地で、その広さは東西約75m、南北約160mの独立した状態にある畑であった。それでここは岩瀬川の河岸段丘であるが、前年調査したA、B、C、D、E、Fの各地区のある台地より約20m低く、その標高は172mで、至近の平地からの高さは約40mである。そしてすでに畑に開かれたとき山丘を削って整地されていたが、北端部に残っていた切残された部分の元の地表から計れば、古い地表を約50cm削平して高い部分の土で低い部分を埋めていることが知られた。しかし畑の状態は大体に西方が高く東方が低く、北方が高く南方に低い地勢を示していた。

予備調査の情報によれば第2図のトレンチ6、7、8のある里芋畑に最も多く土器の破片が散布していて、最も有望ということであったが、ここにはまだ里芋が植えてあり、その南側のトレンチ9、10のところにも甘藷が植えてあったので、これを避けてその北方の作物のない畑に巾2m、長さ10mの第1トレンチを南北に、巾2m、長さ4mの第2トレンチを東西に設定したが、何らの遺跡も発見されなかった。それで休憩用の天幕前に南北に巾2m、長さ22mのトレンチを設定し、これを3m掘って2m飛ばしてまた3m掘るようにして掘り進むと2番目のトレンチに竪穴式住居址の北壁を発見したので壁を追うてトレンチを拡張して第1号住居址を掘り出した。

またこのトレンチの北方に、これと直角の第4トレンチを設定、これは巾2mで長さ20mを6m、5mの繰り返しで掘って行った結果、第2号住居址とその東に第3号を発見した。しかしここの住居址には後に説くように屋根の棰などの炭化物が多く住居址内の調査に時間を費やすことが多く、さらに埋没が深いのでこの状況では到底予定の期間内にG区だけを発掘し終ることも不可能と考えられたので、表土を排するためにブルトーザーを使用することにし残りの土地に4m×4mの地割をなし、これに第2図に見るような符号を付して掘らせた結果、第1号住居址の南方15mのところで第4号住居址、さらにこの4号住居址の南西約18mのところで石皿1個、その他弥生式後期の土器破片や石庖丁などを発見した。

また地割東北隅の外側で土器の破片と石庖丁が塊って存在する状態が第1号住居址と酷似したものがあったので、これを精査した結果、第5号住居址を発見した。その後1号住居址と2号住居址の間に第5トレンチを掘り、里芋と甘藷の取入れを待って第6、7、8、9、10のトレンチを縦横に入れたが、不思議と何らの遺構を認めることもできなかった。それで結局遺跡としては竪穴式住居址4個と付属施設と認められる遺構1個（第3号）を発見したのみであった。

これらの住居址や遺構については後節において詳説するが、住居址以外の場所で発見した石皿について報告すれば、これは完形品ではなく破片で、第12図、図版16で見られるごとく、ほぼ梯形をなすもので、中央の幅 14.5cm×14cm あり、高さは7.4cmで表面が底面より3cmぐらいせまく、縦断形も梯形を描くが、表面はすべすべになっており、石皿の特徴を示している。石質は砂岩である。

次に4個の住居址を見るに、何れも竪穴式住居址で、第5号は堆土が多く全形を出すことができなか

ったが、 他の第１号、第２号、第４号ともに特徴的な床面形を示しているけれども、その形は隅丸方形を基形となし、これに刳り出しまたは刳り込みをもつもので、 その点では49年にＥ区で発掘した住居址と同形である。 第５号も全形を出せば恐らく同形であろう。 さてこの４個の住居址は４号から１号、２号、 ５号と半円形（馬蹄形）をなして位置している。５号の東南方には九州電力の高圧線の鉄塔があったので発掘することができなかったが、 発掘すればなお１個ぐらいの住居址があるかも知れない。それは何れにしても、 このような５、 ６個から10個内外の住居址が半円形を描いて群在する遺跡は全国各地で発見されており、これを単位集団とか、単位集落などと呼ん①でいる人もある。

この半円形の住居のない広場はここで共②同作業をしたり、 或いは貯蔵庫があったりする場合もあり、要するに共同の仕事をする場所と考えられている。 しかしこのような単位集団の住人たちは生活共同体的ではあるが、 まだ経営単位としての真の共同体ではあり得ないといわれている。なぜなれば、このような竪穴住居址の住居③者は余りに少ない。 それは家が小さいからで、１個の住居址には炉跡のあるものとないものとがあるが、 炉跡がないとしてもその住居址に住み得る人はせいぜい４～５人から６～７人にすぎない。

このＧ区の４個の住居址に平均５人ずつ住んだとしても総勢 20人であり、子供や老人が居れば働らける人はさらに少くなり、 その労働力ではせいぜい支谷の水田を耕作し得る程度にすぎない。だから新らしく水田を開いたり、 登呂遺跡の水田で見られたような溝の矢板などを作るような仕事を行うためにはこのような単位集団が数個集って集落を形成しなければならなかったと言われている。

これについてわれわれはＨ区で発見した１個の竪穴住居址と、 49年にＥ区で発掘した１個の竪穴住居址を思い出すのである。 Ｈ区もＥ区もただ１個が独立していたとは考えられない。特にＥ区では住居址からその北方約150$m$のところに19基の同期の土壙墓が発見された。Ｈ区も人家とその畑があったため、さらに広く掘ることはできなかったが、 Ｇ区とＨ区の距離は約250$m$、Ｇ区とＥ区の距離約600$m$で、どちらも呼べば聞える距離にある。

なお最後にこれらの住居址の居住者について記しておきたいと思う。 もとよりこれらの住居址にどのような人が住んでいたかは知る由もないが、 ただわれわれの今日の核家族のように夫婦と子供というような人たちではなかったことは明らかである。 有名な「魏志」の倭人伝にも倭人は「父母兄弟は臥息（ねるところ）を別にする」 と書いているように、弥生後期の日本ではまだ集団婚の時代で母系家族であったから夫婦別居制が行われていたのである。

このことについては故和島誠一氏が奈良時代の養老５年（721） の下総国葛飾郡大島郷の戸籍を提示して、 中央の近畿を遠く離れた関東地方では、 すでに父家長制が支配的であったに拘わらずその郷戸の戸籍を見ると１戸は11人から41人を越える大家族で、 １戸には戸主の４等親のイトコの家族までを結集しており、 夫婦別居の母系制の名残が見られ、 女が居ないのに子のある戸があることを示していられるのは示唆的な文章である。

41人の大家族は１個の家には住めない。④（関東地方ではずっと後まで竪穴住居が行われた） 従って１戸の家族が数個または10数個の住居に分れて住んだわけで、 ここに発掘した弥生後期の単位集団は奈良時代の郷戸に当り、 幾つかの郷戸が集って郷を形成したように、数個の単位集団が集って集落を形成したのである。 だから今回の単位集団の発見によって、大萩に弥生後期の１集落があったことが確認され

たもので、 その学問的意義は大きいものがあると言っても過言ではあるまい。

なお竪穴式住居址には火災によって焼失して建て替えられたり、 或いは何かの事情で増築されたりしているもののある場合があるが、 G地区の住居址については増築されたために柱穴が多くなったり、 あるいは異状に床面が焼けて灰が埋積していた事実も認められなかったから、 これらの竪穴住居址は同一時期（古墳時代前夜）に存在したものと考えられることを付言して置きたい。 （石川恒太郎）

註① 例えば鏡山猛氏「日本原始聚落の研究」（歴史、12—2） 田中義昭氏「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」（考古学研究、22—3）

② 近藤義郎氏「共同体と単位集団」（考古学研究、6—1）

③ 近藤氏、前掲。

④ 和島誠一氏「原始集落の構成」（日本考古学の発達と科学的精神）

## 2．
## 1号住居址（第3図：図版3）

1号住居址は、 南北両側の中央に内側に向って幅70㎝、 長さ1mの細長い入り込みがあるため逆に、四隅の張り出したH字形ともいえる特異な平面形をもつ竪穴式住居であった。

計測値は、南北の長さが東側で5m、西側は5.2mと長く、幅員は中央で4.35m、四隅の張り出し部分は側壁の狭まる南西隅をのぞきそれぞれ2.0mを測る。基本形としては長辺5m、短辺4.4mの隅丸方形プランとみるべきであろう。入り込みを除く床面積は凡そ19㎡となる。入り込みを結ぶ主軸の方位はN54°Eにある。

竪穴の輪郭が検出されたのは地表下90㎝のローム漸移層面であったが、 2号や4号の一部で確認されたように、本竪穴の掘り込みは地表下60㎝の黒褐色土層面にあったものと考えられる。 床面は、地表下1mのローム層内にあって平坦に掘られていた。 ローム層内の現存壁高は10～15㎝であったが、黒褐色土層から床面までは40～45㎝の深さとなり安定した壁高が考えられる。

両側の入り込みは、室内の仕切壁と、 出入口の踏段の役割をもっていたと考えられるが、比較的整然と台形を保っていた北側に対して、 南側は、側壁の切り込みも浅く、床面へ向って広くゆるい傾斜面をつくり、 全面に堅く踏み固められた形跡があり、 踏段としての比重が南側に片寄っていたことを示していた。

柱穴は、主軸線に沿って2個が、 それぞれ入り込み先端から50～60㎝の位置に検出されただけであった。柱穴の間隔は1.5mである。深さは60～65m、どちらも垂直に掘られ、底へ向って次第に狭まり底面は角状を示していた。

炉跡として明確な炉穴や石囲いは検出されながったが、 柱穴を結ぶ中間点の東側70㎝の地点に、径40㎝の範囲にわたって木炭片の混入した焼土とみられる赤褐色の堆積層が確認されている。 或いは、この地点に炉跡があったとも考えられる。 堆積層の一部に楕円状の礫石2個があったが、抜き取り跡は確認されなかった。 この堆積地点と東側壁との間には、終末期とみられる弥生土器が破砕散乱していたが完形品はなかった。竪穴の南端から側壁沿いに北へ1.8mの地点に有孔方形石庖丁1個が検出されている。竪穴の西側には器台片1個が出土しただけで、遺物は東側に集中していた。

この竪穴の屋根組については、２個の柱穴以外に推定できる資料がないが、いずれにしても、南を出入口にした地上まで葺下の切妻造か入母屋風の簡単な屋根組だったとおもわれる。

## 遺　　物

１号住居址から出土した遺物は少なく、壺、甕、鉢、器台の土器片と石庖丁、石鏃であった。

### 土器（第８図：図版９）

(1)は壺形土器である。下腹部を最大径とする扁球状の器体に外反する短かい口縁がつく。底部は資料を欠くが、丸底かやや尖り気味の丸底になるものと考えられる。内面に成形時の凹凸が部分的に残されているが、器面はよく調整磨研されている。胎土は細かい砂粒を混えてはいるが比較的良質の土が使用されてきめ細かい。焼成も良好で、色は淡い赤褐色を呈する。推定復原口径は13cm、器高15cm（＋）である。

(2)～(4)は甕形土器である。いずれも口縁部の一部だけで、下腹部の資料を欠くため完形は明らかでない。(2)は推定口径21cm内外になる。口縁の外反する胴張りの大きい甕である。口唇は平坦に調整され角形を呈する。器面は刷毛目調整され、口縁部には縦走する、胴部には斜走の刷毛目痕が残る。胎土は粗く、多量の砂粒を混入する。焼成度は低く軟弱である。灰褐色を呈する。(3)は推定口径23.5cmがあたえられる。口縁の反りは小さくやや胴張りとなる。口唇は(2)と同じく角形に整形されている。口縁部には横なでのあとがあり、器面は篦調整されている。胎土に石英粒が混入する。焼成度は高く堅緻である。褐色を呈する。(4)口縁部が外開きとなり、胴張りの小さな砲弾形の器体が予想される。器面は篦調整されているが、内面に刷毛目痕が残る。口縁は横なでされている。胎土に石英粒を混える。色調は淡褐色を呈する

(5)～(8)の底部は、裾開き上げ底の(5)(6)は甕形土器の、厚手平底の(7)(8)は大形の壺形土器の底部と考えられる。(2)の甕形土器の底部には(5)(6)のような低脚台状の底部がつくことも考えられる。

(9)～(11)はいずれも小形の鉢形土器である。(9)は復原高９cm、口径10.2cmが与えられる。底径は3.5cmである。口縁は横なで調整されている。胎土は良く精選されており、器面もきめ細かである。焼成も良好で、色は灰褐色を呈する。(10)は欠損部が大きいが、(9)とほぼ同形程度の大きさになるものと推定される。底部は平底である。(11)は口縁の開いた浅鉢である。口縁内外に横なでがみえる。

(12)(13)は、器台形土器である。欠損部分が大きく復原できないが、それぞれの破片からの推定では、円筒形器体の上下が広がる鼓形の器台が予想される。器面はなでつけによって調整されており、部分的に刷毛目痕がみえる。円孔・透し等の装飾は見られない。器壁は厚く(12)では、中央部分で2.4cmを測る。胎土は比較的こまかいが、石英粒を混入している。焼度も良好で、褐色を呈する。

### 石器（第12図：図版17）

(1)は粘板岩製の有孔方形石庖丁である。背と刃の一部が欠けるがほぼ完形に近い。紐掛孔は２孔で背部寄りに1.6cmの間隔を置いて両面より穿孔されている。刃幅３～５mmの両刃で、よく磨かれている。長さ6.4cm、幅３cm、器厚は３～４mmである。(2)も有孔石庖丁であるが、損傷著しく１孔を残しているだけで完形は不明であるが、残存孔径４mm、他方に３mm径の円形擦痕がみえる。石材は緑泥片岩。

(3)は磨製石鏃の破片とみられる。扁平で両面ともよく磨きあげられている。先端も鋭利で、両側の研ぎも鋭い。刃幅は1㎜弱である。基部を欠くため全長、完形は明らかでない。現存最大幅は1.5㎝、石材は粘板岩である。

以上の遺物から、本竪穴が弥生終末期に位置づけられることは、(1)の壺形土器や(12)(13)の土器など、安国寺や加納出土の土器に類例を求められることや、安国寺式の系統でありながらやや後続と見られる都農町岩山の甕形土器に共通する要素をもつ(2)～(4)の土器の存在などから明らかである。同時に、石庖丁の存在は、単に終末期まで石器の残存を証すにとどまらず、1号住居址人の所属した共同体がいまだに石庖丁に依存できる低い生産段階に停滞していたことを示すものとして重要である。（茂山護）

## 3．2号住居址（第4図）

2号住居址は前に述べたごとく、第4トレンチにその西と北の壁が当って発見されたもので、第4図に見られるごとくほぼ東西南北に方位し、東西の長さ4.50m、南北の幅3.70mであるが、西南端に南北1.65m、東西0.7mの刳出しがあるので変な形となっているが、やはりこれを除いて東西3.80m、南北3.70mの隅丸方形の基本形に西南端に刳出しがついたものと見るべきである。また住居址の南北の中心線（CD）は南北の方位より約7度西に傾いていた。

この地方は霧島連峰を目前に見る位置にあるので、度重なる噴火による火山灰の堆積が厚く、地層は地表下約20㎝の深さまでボラ混りの層があり、その下に約40㎝の黒土層があり、その下に20㎝内外の黒褐色土層があり、その下は赤褐色の粘土層となっているが、前に述べたように北高南低の地勢なので竪穴住居址は北壁では地表下0.6mの黒土層から、南壁は地表下0.8mの黒褐色土層から下に掘り込まれ、その床面は北部では黒褐色土層に、南部では粘土層に設けられていた。図面の南壁が著じるしく円形となっているのも、粘土層のため壁の線が判然とし難かったためである。

この地勢はまた住居址の壁の高さも北壁が0.2mで、南壁は0.10m～0.07mとなっていたが、これは切り過ぎで南壁も褐色土層の上から掘り込んで壁は0.2mあったものと考えられる。

床面にはピット1個がほぼ中央にあり、ピットは径0.27m×0.22mのやや楕円形、深さ0.35mであった。そして実測図に見られるように床面に四方から柱の炭化したものが中央のピットの方向に向って放射状に残っており、この住居址が1本柱の家で、屋根は方錐形に葺かれていたことを示していた。またピットの南方に図に見られるような凹んだところがあり、灰が若干遺存していたので、これが炉跡であると思われた。床面の南西部の刳出しは何であるか、今のところ不明であるが、ここの床面に長さ0.2m、幅0.1mの平たい石が踏段代りのように置かれていたので、ここを出入口と見る資料になるかも知れない。もっとも石はこの外に床面の諸所に7個あったが、そのうち4個が床面の東北隅に塊って在ったことも注目された。また床面には土器片が諸所に散布し石片もあったが主な遺物は次の通りであった。

### 遺物

#### 1．土器

土器はほとんど破片のみであったが、床面の西北隅に近く口縁部破片と、東北隅近くに腹部以下のかなり大きい土器があったのは収穫であった。口縁部は二重口縁の坩の破片で、復原すると口径0.16m、

唇径0.136m、唇高0.025m、首部の径0.09m、首部の高さ約0.06mとなる。今1個は腹部以下で、高さ0.10m、底径0.06m、底の高さ0.015mの上り底で灰褐色を呈し、腹径約0.17mで表面には著じるしい文様は認められないが、底部の縮まったところに縦線がある。この両破片は接合されないが、この両破片に腹部をつけたような坩形土器の各部分と見て大過はないであろう。

**2．石　器（第12図：図版16）**

石器としては石庖丁の破片1個があった。それは高さ約2.8cm、幅2.2cmの3角形状の石庖丁の先端部破片で、厚さ0.2cmの小さいものであるが、粘板岩製で1方側が刃をなしており、1面は剝落している。

**3．自　然　遺　物（図版17）**

イ　果実の種子　床面の北西部で椎の間から2個発見された。炭化しており梅干の種子に似ているが、形が少し小さく梅干の種子のように両端が尖っていない。大きさは大小2種で大きい方が長さ1.7cm、幅1.5cm、厚さ1.2cmで小さい方は長さ1.5cm、幅1.4cm、厚さ1.1cmである。専門家の意見ではアンズかスモモであろうということであるが、アンズは「万葉集」にカラモモとして出ているが、弥生後期に伝来していたかには疑問があるのでスモモと見たほうが正しいのではないかと思う。

ロ　椎これも炭化物であるが、宮崎大学農学部の大塚誠氏に依頼した研究が別項に出ている。

（石川恒太郎）

**4．**

**3　号　遺　構（第5図）**

これは2号住居址の東側に接して存在した。竪穴住居址に似たもので、黒褐色土層内に掘り込まれており、第5図に見られるごとく隅丸方形に近い床面をもち、その広さは南北の長さが3.5m、東西の長さ2.9mで、深さ（壁の高さ）は甚だ低く0.10m内外であるが、中央部に向って凹んでいて中央部は0.20mぐらいの深さであった。そして遺構の中心線は南北の方位より約13度東に傾いていた。また2号住居址の中央のピットの中心からこの遺構の中心（石と石の間）との距離は4.34mあった。だから2号住居址の東壁とこの遺構の西壁は極めて接近していた。

この遺構が竪穴住居址と異なるところは、形が小さいばかりではなく、ピット（柱穴）と思われるものがなく、直径5cm内外の竹を立てる程度の小孔は北部に1、2個存在したが柱を建て得る穴はなかった。このことは、この地方の住居址が必ずといってよいほどに炭化した椎を遺存しているのに、この遺構にそのことがないのは上屋を蔽う屋根がなかったことを示すものと思われる。床面には土器の小破片が数個散在したのみであったが、ほぼ中央に南と北に大きい自然石が2個存在したことが注目された。

南側の石は表面が0.25m×0.25mで高さ0.12m、北側の石は表面が0.30m×0.27mで高さが0.15mあり、何れも表面が平らであるが、どちらも土を盛上げた上に平らに据えられており、その表面は床面より0.30mぐらい高くなっており、両石の距離は1.15mであった。このような点からこの遺構は2号住居址に付属する施設であろうと考え、一応住居址から除外したのである。その理由は前に述べたが、何よりも住居したことを示す炉跡やピットおよび床面に土器、石器というような生活用具を遺存していなかったからである。

それならばこの遺構は何であるかということを決定することは甚だ困難であるが、遺物と見られる2個の石に注目すると、これは表面が平らかで、高さが床面から0.30mあり、2人の人物が腰をかけて対座するに都合がよいように約1mの間隔をおいて置かれている。だからここに人が2人対座して何かの品、例えば席か竹細工といったようなものを製作したか、あるいは表面が水平になるように置かれていることは、この上に何かを置いて工作をしたか、ともかく何らかの作業場であろうと考えるのであるが、後例を待って決定する以外には致し方がない。（石川恒太郎）

## 5.

### 4号住居址（第6図）

G区の全面調査のため、ブルドーザーを入れて表土の除去作業をなし、その後、碁盤目状に区画をして発掘を始めたところ、本住居址が発見された。この地点の層位は表土より55cmは黒色土層、その下、25cmは粘土質黒褐色土層となり、さらに、その下部に黄褐色土層が認められる。層位を上から1層、2層、3層とすれば、この住居址は第2層の中間層ぐらいから掘り込まれているようである。形態は方形の隅丸状を呈しているが、特異なのは北側に幅70cm、長さ1.4mの床の間状の入り込みがつくられ、また一方、南側には、長さ約1m、幅70cmの張り出しが設けられていることである。この両方の特異な施設は何の目的を有しているのか不明であるが、弥生式終末期の遺跡で時折、このような特殊な床の間状施設のある住居址が西日本で発見されることがあり、また、本県の川南町把言田遺跡から発見された住居址も両側に不整形の長方形型、入り込みが設けられていた。(註)

柱穴は東西の中央部を見通した線上に2ケ所発見され、東側の柱穴は上部径38cm、深さ42cm、また西側の柱穴は東西が35cm、深さ40cmとなっている。なお、南側の中央部、土器群の下に径25cm、深さ25cmの柱穴、さらに、南西の隅に径45cm、深さ25cmの柱穴が確認できた。弥生式土器は住居址の南東部に散在していたが、中でも南側中央部の土器群は集中的に堆積していた。なお、中央部から北側には、殆ど土器片は認められなかった。

また、石器類は極めて少なく、確認できたのは、石器2点と半製品1点である。そして、この住居址で注目すべきことは、中央柱穴の方向に炭化した木片が多数発見されたことである。これらの木片は、恐らく、住居に使用された材木の遺存したものと推定されるが、径は5cm～7cmのものが多かった。なお、土器群の層位は住居址の床面から25cm～30cmの上部にあり、床面に下るに従い、土器片は少くなった。このことはどのようなことを意味するのか明かではないが、この住居址での生活年代にそれだけの年月が経過しているのかもしれない。この4号住居址は、東西4.75m、南北4.46m、深さ約30cmとなっている。

註、「川南町把言田遺跡」昭和33年3月　宮崎県文化財調査報告書第3輯

### 遺物

G区の4号住居址内からは多量の弥生式土器が発見されたが、大部分は破砕されていた。器形としては甕形土器、壺形土器、高杯形土器、長頸形土器、それに台付土器などであり、また、石器も2点だけ検出された。

**甕 形 土 器**（9図1～3）

(1)は、口縁部が短く外反しており、また、胴部はかなり丸みを有しながら底部に延びている。底部は欠損しているので形態は不明であるが、恐らく、平底であろう。

（2、3）(1)と同一形式の甕形土器であり、器面の荒い粗成土器である。色調は黒褐色を呈している。(2)の口径は11cm、高さ16cmとなっており、また、(3)は口径12.7cm、高さ15.5cmある。

**高 杯 形 土 器**（9図7～10）

(7)は高杯の脚台であるが、脚から底部に下るに従い、かなりの「ふくらみ」を有しており、一般的な弥生式土器の脚台とは異っている。それに比べ(8)の脚台の「ふくらみ」は少なくなっている。さらに、両脚台には透し孔も認められる。焼成はあまり良好ではなく、器面調整の痕跡もない。（9、10）は高杯形土器の杯の部分であるが、(9)は良く磨研してあり、色調も灰褐色を呈している。(10)は粗面で、胎土も砂粒子含みの粗成土器である。

**壺 形 土 器**（9図4～6、10図11～14）

(4)はく字形口縁部を有する壺形土器の口唇部に、わずかではあるが、櫛描文が認められる。器面は刷毛目で調整されており、焼成も比較的良好である。（5、6）はく字形口縁土器の胴部から底部にかけての土器片である。両土器片ともに胴部は大きく張り出し、底部は平底になっている。また、胎土は微粒子を含み、器面は特別に磨研した痕跡はないが、比較的に良好である。

(11)の口縁部は外反りになっているが、胴部は球状に丸みをおび、さらに、底部は肥厚な細形の平底となる。焼成もかなり良く、器面も調整され、色調は黄褐色を呈している。(12)の土器は(11)と器形がほぼ同一であるが、口縁部が直立している。胴部は(11)のように球形状をしているが、底部は貼りつけ状の肥厚な丸底になっている。粗い胎土を使用し、器面も調整しておらず、色調は赤褐色をしている。(13)は立ち上りの口縁部を有しない細形口縁の土器であり、口唇部に明瞭に、櫛描文が確認できる。胴部は中ほどが角張っており、底部も小形の平底となっている。色調は灰褐色を呈しており、器面はかなり磨研された痕跡が認められる。この器形の弥生式土器は宮崎県中部平野地区で発見例があるが、従来、出土例の極めて少ない土器である。(14)は広口の壺形土器で口縁部の径は肩の部分の径より、やや狭い程度の横広い土器である。口縁部は外に大きく反っているが、頸部から肩にかけて急にふくらみができ、胴部はあまり丸みを呈することなく底部にいたり、小形の平底となっている。色調は灰褐色、胎土、焼成は比較的に良好であり、器面も軽く磨研してある。

(11)の口径9.4cm、高さ15cm、(12)の口径7.8cm、高さ14.5cm、(13)の口径5cm、高さ15.6cm、(14)の口径15.5cm、高さ14.7cm。

**長 頸 形 壺**（10図15、16）

この器形の土器では本遺跡出土のものより年代がさかのぼると胴部に比較して頸部が短くて、少し細くなり、頸部に対して主体部が大きく比重をしめ、底部も平底となる。(16)はかなり口縁部が広く、長さも主体部の高さよりも長い。胴部は楕円形状をしており、底部は、わずかに尖り気味になっているので不安定な土器といえる。焼成も良く、器面は磨研されている。口径は10cm、高さ20cm、胴径15.3cm、

長頸の長さ11.5cm、⑯は長頸の部分が欠損しているので、胴部のみについて考察すると、⑮と異っている点は胴部が丸みがなくなり、角張っていることである。底部も⑮と同様であるので、恐らく、長頸の部分も⑮と類似していると推察される。なお、焼成、器面調整も殆ど⑮と似ている。胴径12.5cm。

**台付土器**（10図17～23）

⑰、⑱、⑲は甕形土器から変化した深鉢形土器であるが、台付とは称しても、殆ど深さのない脚台を有している。しかし、一応、広義の台付土器の範囲に入れることにする。３ケとも口縁は外反となり、底部が⑰、⑱は揚げ底、⑲が肥厚の平底となっている。焼成は何れも比較的に良好である。⑰の口径は10.5cm、高さ11.4cm、⑱は口径が11.6cm、高さ10.2cm、⑲は口径が12.5cm、高さは11.3cm、⑳は椀形台付土器であるが、外傾の口縁で反りがなく、底部は揚げ底となっており、脚台も、大分、高さを増して明瞭になり、焼成も良好である。㉑は同じく椀形をしているが、脚台の裾が大きく拡がり、安定性を保っている。また、胎土も良質であり、調整された器面からは土師器の感触をうける。⑳の口径は11.6cm、高さ9.6cm、㉑は口径13.5cm、高さ10.7cmとなっている。㉒、㉓は土器小破片による推定図であるが、㉓が揚げ底の脚台で、その一部に櫛描文が認められる。㉒は台付土器の椀形の部分と推測される。

**石　器**（12図５、６）

４号住居址からは殆ど、石器は発見されなかったが、２点だけ検出された。⑸は粘板岩の磨製楕円形石包丁であり、２ケ所に穿孔があり、刃部は下方に、上部が背になっている。長さは不明であるが、幅は3.7cm、厚さは中央部で５mmある。⑹は同じく粘板岩製の三角形磨製石鏃であり、恐らく、無茎であろうと推定される。なお、両刃に沿って鏑がつくられている。⑵の長さ約3.3cm。

以上、第４号住居址とその出土遺物について考察してきたが、特に、この住居址からは多量の弥生式土器が発見され、しかも、その土器の形式が各種様式を含んでいたことが特徴といえよう。そして、その中には出土例の少ない台付土器、高杯形土器なども認められるので、今回の大萩遺跡調査では各種弥生式土器のセットとして参考になる資料だと思う。これらの土器形式は東九州一帯に分布しているのに共通し、一応、安国寺式系統の土器に類似している。編年的には、弥生式後期末葉から終末期にかけてのものであるが、さらに、土師器への移行期の感触の土器もわずかではあるが認められる。

なお、この住居址の形態が床の間状を呈する特殊なプランを呈していることも、その編年が弥生式終末期に比定されていることは土器編年とも符合するようである。　（日高正晴）

## 6.

## 5号住居址（第７図、図版７、８）

本住居址は、Ｇ区で発見された住居址群の東端に位置し、４号住居址から北東50m、２号住居址から東25mの地点にある。この地区の標高は先述のように西側岩瀬川寄りが高く東側が低くなっている。従って本住居址の床面は、西方に位置する４号住居址よりも約50cm低く標高171m程で、岩瀬川からの比高約30mである。

竪穴床面の深さは、地表から約110cm～120cmで、形状は隅丸方形を呈していたが、東側の壁にあたる部分の上が排除された土の捨て場にあてられ多量の土がうず高く積み上げられていたため隠れている部

分はわずかと思われたが発掘不可能のため確認する事ができなかった。規模は、西辺390cm、北辺の現長360cm、南辺の現長415cmで東西に長くその主軸は、N88°Eの方向に向きローム層に掘りこまれていた。竪穴は浅く、壁の現在高は約15cm～20cm程であった。床面は、中央部がやや高く、東側がやや下り一面に第1オレンジ層の赤褐色土と上層の黒土との混り土で固められていた。柱穴とみられるピットは中央部から1個検出されただけで、その径は30cm、深さ50cmで、底部は1辺15cmの三角形状を呈していた。おそらく柱の根元は棒杭のように角錐状に加工されていたものと思われる。このほか、北東部の位置に東側壁に沿うて短辺40cm、長辺現長100cmで上面長方形状の土壙が若干内側に傾斜をもちながら掘りこまれていた。深さは床面からの比高－30cmで、内部からは数点の土器片しか発見されなかった。この土器片はおそらく床面からの落ちこみと思われる。土壙が住居址内で、たまに見られる貯蔵穴であるかどうかは不明である。

遺物は、土器片が南東から北西にかけて一面に散乱し、東側の中央部からは石包丁、石斧状石器、北側には敲石兼磨石が1個ずつ発見された。また、覆土の上部から石庖丁の破片が2点採集されている。このほか、中央ピットに向って各所に倒れこんで椎の炭化物が残っていた。

本住居址は、中央部に1本の親柱をもった構造の家屋であったことが想像される。

## 出土遺物

### 1．土器類　（第11図）

土器は、表土近くから床面に至るまで出土し、底部破片の量からみてもかなりの数の土器が用いられていたはずなのに実際には、完形品は1点もなく、しかも、復元できた土器は甕形土器1個だけであった。前記のように、出土の垂直分布の幅は広かったが型式上、上下の土器には本質的な差違は認められなかった。

### 壺形土器　（第11図(1)～(3)）

(1)は、複合口縁の破片で推定口径15cm、口縁端外面には4条の波状櫛目文がみられる。口唇部上面は幅広く平らでやや内傾しながら内側へ落ちているが外側は若干外方へ張り出している。色調は、黄褐色を呈し、胎土には多量の砂粒を含み焼成はあまり良好とはいえない。頸部には、へら状の工具で調整されたと思われる縦じまの条痕が見られる。

(2)も、複合口縁壺形土器の破片で、推定口径16cmで大きさは(1)と大差ない。また、口縁部外面には波状のリズムがかなり乱れているが同様に櫛目文がある。口唇部上面は丸目を帯び(1)のような外方への張り出しはない。色調は、黄褐色を呈し、胎土には多量の砂質分を含み、表面がザラザラした感じで焼成は良好とはいえない。内面、外面には刷毛目の調整痕が見られる。この破片は、頸部から肩部へ移行する所の輪積み接合部がはずれたものである。

(3)は、推定口径11cmの壺形土器の破片で、口縁部は頸部からやや立ち上り気味で外方へ開いている。色調は赤褐色、胎土には、砂粒を含み焼成は硬く良好である。口縁部から頸部にかけては横なでの刷毛目調整痕があり、肩部には、斜めに鋭利な工具による短線の線条列痕が見られる。

**甕形土器**　(第11図(4)～(7))

(4)は、全形が復元できた唯一の資料で、口径19.5㎝、器高25.8㎝を計測する甕形土器である。下腹部から肩部にかけて一面にススが付着し、上腹部には輪積成形による凹凸が残っている。器形は図のように口縁部はくの字形に外反し、肩部の張りはなく胴部から直立に近い状態で成形されている。底部は裾開きの上げ底で十分な調整が施されないまま焼成されているの特色である。色調は、黄褐色で、胎土には砂粒を含み焼成は普通である。上腹部はたてなでの刷毛目調整、下腹部はへら状工具によりするどい調整条痕が見られる。

(5)は、口縁部から上腹部にかけての破片で、推定口径26.5㎝の甕形土器である。口縁部はくの字形に外反し、肩部の張りは弱いが幾分かふくらみをもち、頸部の部分もはっきりと区別され歴然としている。下腹部から底部の部分が欠失しているので全形は不明であるが、(4)の甕形土器や周辺遺跡の同時期出土の甕形土器の例からみて、やはり若干裾開きの上げ底をもった器形とみられる。焼成は悪く色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含んでいる。口縁部には横なでの刷毛目調整、肩部から腹部にかけては斜めに刷毛目の調整が見られる。全面にススが付着し、特に口縁部や頸部の各所には顕著に見られる。

(6)推定口径18㎝、推定最大腹径17.5㎝の甕形土器の破片で、この土器は頸部から立ち上りながらくの字形に外反する口縁部をもち、肩部とのつなぎ目に小さな段をつくるのを特色とする。このような土器はえびの市灰塚から出土している。肩部の張りはやや強く、その最大幅は口径とほぼ同じ程度である。下部が欠損しているので全形は不明であるがやはり他の甕形土器と同様、裾開きの上げ底をもった器形とみられる。色調は黄褐色で胎土には砂粒を含み焼成は硬く良好である。器面は研磨調整されている。

(7)は、(5)によく似た甕形土器の破片で、同様に口縁部がくの字形に外反し、肩部付近の張りは弱いが若干のふくらみをもち、頸部との区別もはっきりとしている。推定口径は15㎝で比較的小さな甕形土器である。色調は黒褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は普通、内外面とも刷毛目の調整痕があり、また外面にススが付着している。

**鉢形土器**(第11図(8)・(9))

(8)・(9)は、いずれも口縁部付近の破片で推定口径13㎝、10㎝の小さな鉢形土器である。この土器は、口縁部が肩部付近からほぼ直立の状態で成形されているのが特徴といえる。色調は黄褐色、黒褐色を呈し、胎土には砂粒を含み焼成は良好である。器面はブラシ仕上の調整が見られる。

**高坏形土器**　(第11図(10)・(11))

(10)・(11)は、脚台の破片でこれから高坏の器形を知ることはできないが、(10)は、昨年度調査した台地上段の土壙墓周辺から出土したものと同形である。胎土には、多量の砂を含み、表面がザラザラした手ざわりで焼成は至って悪い。色調は黄褐色、赤褐色を呈している。

**器台形土器**　(第11図(12)・(13))

(12)の器台は、上下いずれも欠失しているので器高を計測することはできないが円筒状脚柱の最小幅は

8㎝で器台としては大きなものではない。円柱の中程には4個の円形すかし穴が廻っている。色調は赤褐色で胎土には小礫を含み、焼成は良好である。器面にはへら状工具による調整条痕が見られる。同形の器台が宮崎郡清武町加納から発見されている。

⑬の器台も上下いずれかの一方が欠失しているため、全形を知ることはできないが、これまでの器台の器形から推察すると、上下ともほぼ同形に成形されているのでこの器台の場合も欠失部は現存の開口部に近いものだったといえる。この器台の特色は、朝顔状の開口部に更にもう一段外傾した縁端部を接続させたもので、安国寺式系高坏形土器の一型式と相似したつまり外折反転の開口縁端部を有していることと開口部の肩部に線刻が見られることである。現存の脚柱残欠には、外側から貫通して設けた2段の円形すかし穴があるが実際には2段以上のすかし穴があったと思われる。色調は、赤褐色を呈し、へら研磨された精製土器でこのようなタイプの器台は今まで県内から発見されたことはない。

**2．石　器　類**（第13図(1)～(5)）

石器は、表土に近い攪乱土層から石庖丁の破片が2点、竪穴東側中央部から完形の方形状石庖丁1点同じく扁平石斧状石器（未完成石庖丁？）1点、北側中央部から磨石兼敲石1点が発見された。

**石　庖　丁**　(1)～(3)

(1)は、長軸9.6㎝、短軸5.5㎝の頁岩製で両側に切込みをもった方形石庖丁である。背部と両端は打ち欠いで調整しているが両面は平らな自然面をそのまま利用している。刃は、両刃式である。

(2)は、残欠でしかも、今、残っている抉り込みが、貫通した穴の一部を思わさせるようなでき上りなので形の判断に苦しむが、背部や刃部の状態からみて、やはり抉り込みを両端にもった磨製の方形状石包丁といえる。

(3)は、半月形状石庖丁の残欠で、材質は頁岩、背部は直をなし、外湾の部分に両刃の刃がある。

**扁平石斧状石器（未完成石庖丁？）**　(4)

長さ10㎝、最大幅4.7㎝の大きさで大へん薄い石斧状の石器である。方形を呈し、両端、両側をすり切って成形しているのが特色である。若しかすると石庖丁の未完成品かも知れない。材質は緑泥片岩で両面とも磨き上げている。

**敲　　石**　(5)

拳大の大きさで、材質は砂岩、両端に使用痕が見られる。　（田中茂）

## 7．住居址木材炭化物の樹種

G区2号、4号、5号住居址に遺存した、小屋組に使用したと考えられる木材の炭化物について、樹種の鑑定を行った。その結果は次の通りである。

2号住居址遺存木材炭化物：4個体の木材炭化物の資料について調査した結果、1個体はコナラ（Quercus serrata Thunb.）、3個体は同一樹種でクサギ（Clerodendron trichotomum Thunb.）であった。

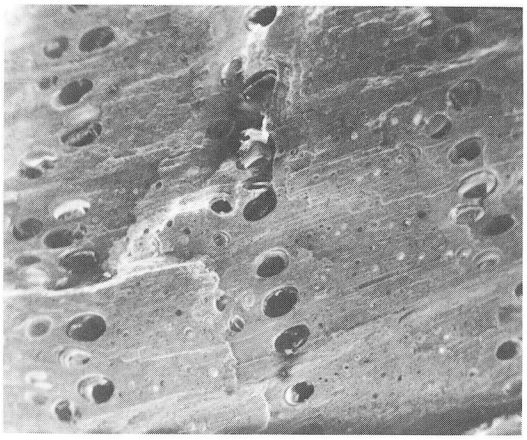
4号住居址遺存木材炭化物：8個体の木材炭化物の資料について調査した結果、3個体はコナラ（Quercus serrata Thunb.）、5個体はシイノキ（Castanopsis cuspidata Schottky）であった。

5号住居址遺存木材炭化物：8個体の木材炭化物の資料について調査した結果、4個体はシイノキ（Castanopsis cuspidata Schottky）、2個体はコナラ（Quercus serrata Thunb.）、1個体はハンノキ（Alnus japonica Sieb.etZ uce.var.genuina Call.）およびヒサカキ（Eurya japonica Thunb.）であった。

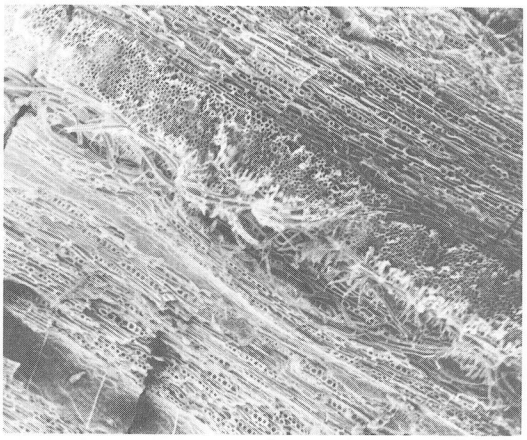
以上の通り総計20個体の資料について調査した結果、コナラ、シイノキ、ヒサカキ、ハンノキ、クサギの5樹種を認めた。小屋組に使用したと考えられる木材は、広葉樹のみで現在の一般建築材料であるスギ、ヒノキ、マツなどの針葉樹が見出されなかったことは、前回の調査結果と同様であった。南九州、特に宮崎地方はカシ、シイノキの中心郷土地帯であり、遺跡の近くにも、カシ、シイノキを中心とした常緑広葉樹天然林が存在したであろう。これら遺跡近くの常緑広葉樹林内に生育する比重、硬さともに中庸な広葉樹を伐採して、住居建造用の資材として使用したものであろう。（大塚誠）

# 炭 化 樹 種

## コ ナ ラ

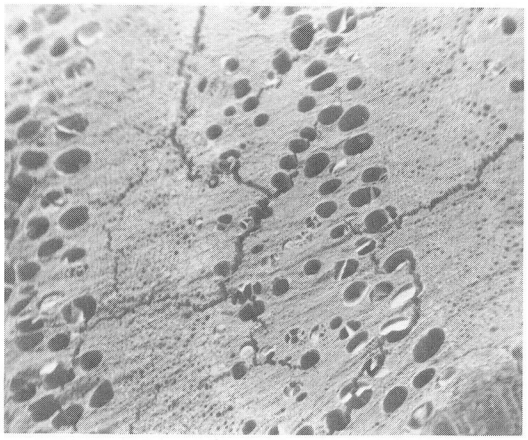


×30　木口面

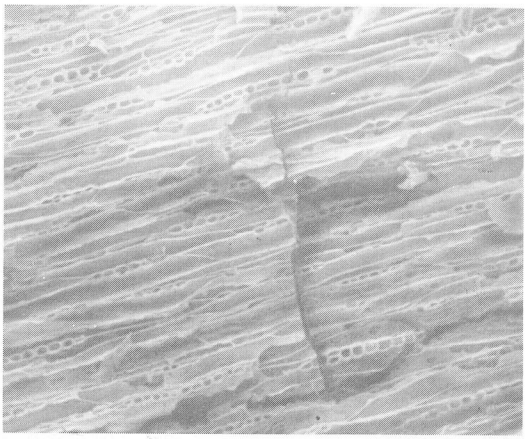


×100　板目面

## シイノキ

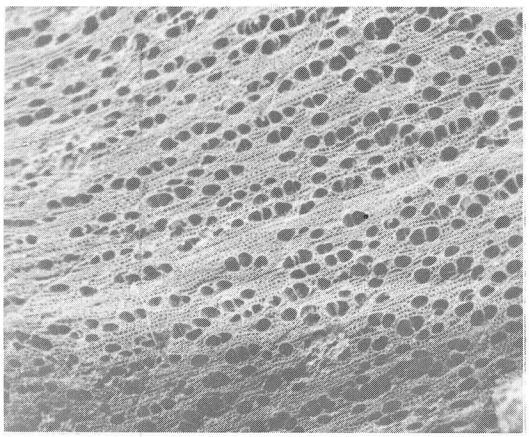


×50　木口面

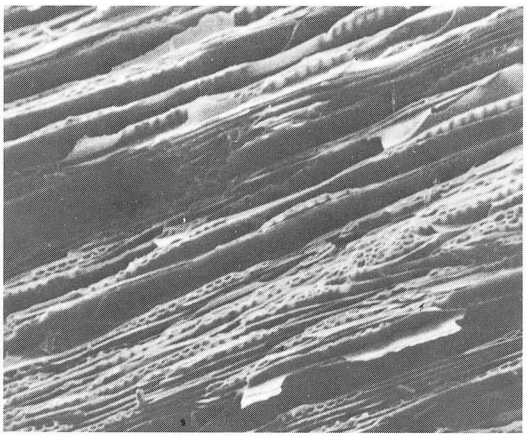


×200　板目面

ハンノキ

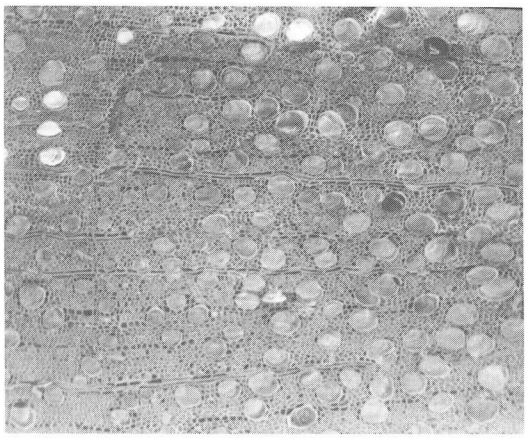


×100　木口面

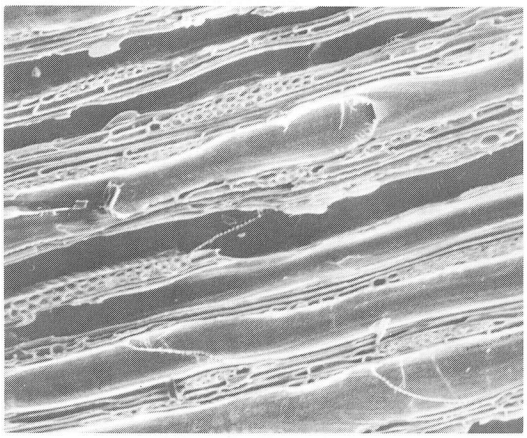


×200　板目面

ヒサカキ

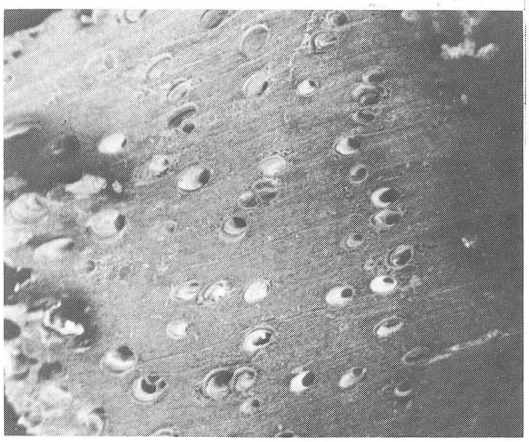


×100　木口面

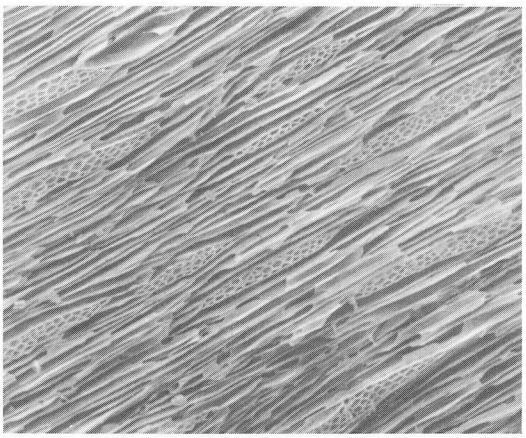


×200　板目面

クサギ



×30　木口面



×200　板目面

# Ⅳ H 地 区（第14図、第16図）

## 1 調 査 区 の 概 要

H地区は、第3期農地保全整備地域のⅡ区に相当し、岩瀬川の蛇行に連れて台地の一部が南西方向に台形状に張り出している地域に位置する。G地区とは谷を隔てて南方に連なる台地である。標高 168*m*～170*m*、三方を流れる岩瀬川との比高約30*m*、台地土は北西を微高地として、南西及び南東隅の緩傾斜地域をのぞきほぼ平坦であり、戸数6戸の大萩部落の所在地でもある。部落をとりまく畑地の大半は、桑畑と飼料畑に利用されていた。

分布調査の結果、台地北西の微高地（A地区）と、東南に面した台地縁の地域（B地区）に、少量の弥生土器片の散布することが確認されていた。従って、H地区では当然このAB2地区が調査の対象地区とされたが、栽培作物や調査員の出入り、日程等の諸事情により、B地区だけの調査に終始し、A地区まで調査が及ばなかったことは遺憾であった。

B地区は、岩瀬川に面した台地縁に東西に広がる畑地で、凡そ 150*a* の広さを有し、ほぼ中央に南北に通る農道があり、畑地を二分している。

調査は、地表に土器片の散布する地点を重点にトレンチを設定し、遺構の所在と包含状態の確認を目的に進められた。トレンチは幅1*m*、長さ10*m*を単位として、農道の東側では5ケ所、西側には3ケ所の地点に設定し、調査に伴って随時拡張された。トレンチの設定位置は図示する通りである。

B地区畑面は、厚さ 25*cm*～40*cm* のスコリア混りの深い表土層に覆われ、農道付近を最高地として、東側では台地縁から北東の谷方向へ、西側では南西に向ってゆるやかな傾斜がみられた。土層も地形の傾斜に添い土層の厚薄や部分的な欠層など地点によりある程度の変化がみられたが、大方第2トレンチの土層に代表される。第2トレンチでの土層は次の通りであった。

Ⅰ層　スコリア混りの黒土層　(25～40*cm*)
Ⅱ層　漆黒色土層　(30～40*cm*)
Ⅲ層　黒褐色粘質土層　(20～30*cm*)
Ⅵ層　橙色火山砂質層　(30～40*cm*)
Ⅴ層　青灰色硬砂層

今国の調査で検出された遺物は、Ⅱ層からⅢ層にかけて出土しているが、その量は少なく、単独に、断片的で、直接包含層や生活遺構と関係づけられるものはなかった。主な出品は次の通りである。

2T．櫛描波状文のある二重口縁部破片
4T．チャート製石匙1個・条痕土器細片
5T．黒髪式糸T字形口縁部
8T．高坏脚台

遺構としては、1・3・8の3ケ所のトレンチ内に検出されたが、完全に全貌を確認できたのは8トレンチ内に発見された隅丸方形の竪穴だけであった。1トレンチでは、中央部分の地表下 60*cm*～80*cm* の漆黒土層内に、径80*cm* のピットを中心に半円形に礫石と粘土で堅築した土間施設が、土台石に埋置

したとみられる五輪塔の笠石と共に検出され中世以降の建築遺構の存在を予想させたのであったが、調査期間内に全貌を明かすことができなかった。また、3トレンチ内で発見されたピットは径30cm～40cm、地表下80cm～90cmの褐色粘質土層内に6個が検出されている。ピットの配列は無秩序で、竪穴遺構も確認されず、住居址遺構としては確認できなかった。（茂山護）

## 2 遺構及び遺物（第15図）

### 第1号 遺構（住居址）

この遺構は、1m×10mの第8トレンチを入れたところ遺構の中央部を横断する形で表われた。そこで南北にトレンチを拡張してその検出につとめた。

遺跡立地の層位は第1層に高原スコリア混入の耕作土層が20cm、第2層に黄褐色土層が20cm、第3層に黒褐色土層が22cm程度あり、第4層に褐色土層が5層cmに第5層に通称赤バンと呼ばれる第1オレンジ層があり、第6層に青黒色砂質土層（牛のすねローム層）がはいっている。

遺構は第4層の褐色土層を上面として第5層の第1オレンジ層を主層として320cm×310cmのほぼ正方形を呈し、深さは南側で18cm、北側で27cm、主軸はN8°Eをさす。この遺構からはピットを確認することはできず、出土遺物についても極少であった。

遺物は、遺構中央部付近に弥生時代終末期のものと思える高坏の脚部が1点と土器片1点が発掘されていのるみである。それに遺構掘り込みの周囲縁りがシャープであり、あまり破損部がみられない。またH地区において住居址と思われる遺構を他に発見できなかったことにより生活遺構としての住居址としては言及しがたい感がある。

### 第2号 遺構

この遺構は第1号遺構の南側1部を切り込む状態で発見され、遺構は第2層の黄褐色土層を上面として青黒色砂質土層（牛のすねローム層）を約20cm掘り込み床面としている。形状としては上部径550cm、下部径400cm、深さ80cm程度の逆円すい台状をしている。この遺構には第1号遺構と切り合った南側に長径160cm、短径70cm、深さ60cmの楕円形状の掘り込みがある。その周辺には径15cm程度の川原石が存在したのみで遺構に関する遺物は発見することができなかった。しかし遺構発掘中に後世の埋土の中から砥石と小型石器をそれぞれ1点採取している。これについては後述する。

遺構内の土壌については高原スコリアの単純土壌であり、他の混入土はみられなかった。

遺構の性格については判然としないが、床面に少量ではあるが炭が出ていることから遺構南側の掘り込みを焚き口とした炭ガマであったのではないかとの感はあるが、それを立証するものはなく定かでない。

### 遺物

### 砥石（第16図）

この砥石は第2号遺構埋土より出土したものである。硬質砂岩を素材としており、長軸10cm、幅7cm、厚さ3cmの小型砥石である。使用面は表面、右側面、左側面の3面を利用してかなり使用されたも

のと思われ凹状の使用痕をみることができる。裏面については砥石作成上、原石から剝離した面をそのまま残している。

**ノミ型石器（第16図）**

この石器は第2号遺構の埋土の中より採取したものである。赤色頁岩を素材としており、長軸5㎝、幅3㎝のほぼ長方形を呈し全面磨製である。断面は菱形を呈している。刃部においては両側角に使用痕を認めることができ、中央刃部は使用時における破損剝離をみることができる。また右側裏において、かなり大きい破損剝離がみられる。

磨製については表面、裏面とも横磨りを行っており、側面は縦磨りを行っている。

こうした石器については、宮崎市阿波岐原の石神遺跡のノミ型石器にその類例をもとめることができよう。

（野間重孝）

# Ⅵ　I　地　区

## 1　調査の概要

I地区は、50年度整備計画地域の中で最も畑地面積の広い第Ⅲ区に相当し、大字柿川内に属する。岩瀬川の流れに沿って北西から南東へ広がる長さ約1㎞、幅凡そ500mの細長い台地である。台地面は南へ向ってゆるやかな傾斜をなし、台地縁より凡そ100mあたりを境に段差のある地形を形成している。

今回調査したのは台地の西端にある柿川内3386番地の畑地で、H地区の調査地点とは、谷を隔てて対向する位置にあたる。

調査は24日午後から25日にかけて、畑の中央と台地縁に近い地点に東西方向に1m×20mと1m×10mのトレンチを設定発掘した。この地点は共に、分布調査で土器片の散布が確認されていたところであり、遺構や遺物の包含状態を確認することに重点を置いたトレンチ設定であった。

発掘の結果、トレンチ内からそれぞれ土器片1個が検出されただけであった。土器片は第Ⅲ層の漆黒色土層内に包含されていたもので、無文と刻目凸帯のある弥生土器片であった。破片は3㎝方でかなり磨滅がみられ、近くに包含層の存在を示す状態にはなかった。

以上の結果から周囲への拡張は、G地区の調査後に継続することにして一応中断したのであったが、その後調査期間内にはついに再調査できなかった。　（茂山護）

# Ⅵ　結　　語

昨年度、第二次調査も終わりに近づいた頃、本年度の調査が予定されている台地の一部（G区）を歩いた。そのとき、上の台地との関係からみてこの次の調査は、墳墓の発掘ではなく、弥生か古墳時代の住居址の調査になるだろうと思った。調査の結果はこれまで紹介されたように弥生終末期の住居址であった。

今まで、宮崎県下で調査された弥生期の住居址も10数例あるがいずれも点としての発掘に終わり、面としての発掘、つまり集落としてとらえることはできなかった。[①] それが今回の調査では、集落としてとらえることができた上、昨年度、E地区発見の1軒、それに本年度のH区の1軒とG区の5軒と併せて7軒も発掘できたことは本県の学史にとって初めてのことであり、劃期的な調査であった。

本住居址群の特色は、まず第1に、石川調査員が前述しているように、集落が半楕円形、すなわち、馬蹄形状に営まれていたことであろう。次に、竪穴のプランが隅丸方形を基本としながら一部に方形の造り出しや床面を2分するような施設を設けたりして独創的な面がみられたこと、さらに、家屋構造の根本に係わる床面の柱穴が1個と2個で4個以上のピットをもった住居址がなかったこと等である。それに、付帯施設とみられる3号を除いて他の4軒からは、いずれも、床面中央のピットに向って樋と思われる炭化物の一部が各所に残っていたことも特色としてあげられる。なお、昨年度調査したE区（上の台地）の住居址には、床面中央に4個のピットが認められている。その他、住居と集落については石川調査員がいろいろと先述されているので省略したい。いずれにしても、日向西南の地、後に日向隼人の居住地といわれた諸県地方における弥生終末期の住居址のタイプ、それに集落形態の一端をうかがうことができたのは大きな収穫であった。

出土遺物をみると、石庖丁が、1号址から2個体分、2号址から1個、4号址から1個5号址から3個体分、併せて7個体分も出土していることは注目される。形式は、日向に多いといわれる方形状のものと、普遍的に出土する刃部外湾半月形状の両方がみられる。方形状石庖丁は両端に抉り込みのあるタイプと内側に2個の穴を有するものとがあるがどちらも出土しており、後者は安国寺遺跡から出土している資料[②]とよく似ている。

大萩は、現在でも、灌漑用水に恵まれず広い耕地は全て畑地である。水田は、この台地の下、岩瀬川沿いのせまい平地にわずかに開かれているに過ぎない。従って、これらの石庖丁が果たして水稲用であったかどうかは決しかねる。むしろ、畑作の収穫具として用いられた可能性が大きいのではなかろうか。

県下全域からかなりの数の石庖丁が発見されているが、まだ前期のものは出土していない。中期のものとしてはただ1例高鍋町牛牧の住居址から1個出土している。[③] これは、両端に抉り込みをもつ方形状の石庖丁で大萩5号住居址出土のものと同形式である。しかし、時代的な相違については、中期の資料が少ないので言及することはできない。現在、発見されている石庖丁はほとんど後期のものであるが、このように弥生終末期まで多量に石庖丁が使用されていた事実が判明したことはやはり今回の成果の一つに上げられる。

次に土器についてみると、1号、2号址からはわずかしか出土していないが、4号、5号址からかなり豊富に出土している。これらの中には、昨年度調査した土壙墓の供献土器と同様、畿内、瀬戸内系の

ものも見受けられた。今回、発見の土器は、従来から東九州第５様式として編年されているグループに属するもので、中には、かって安国寺式土器といわれた畿内、瀬戸内の影響を受けて成立した口縁外端部に櫛目文を有した二重口縁の壺形土器や、口唇部に櫛目文が見られる無頸壺、それに長頸壺等の土器が含まれている。このような土器は、小林市や南端の串間市、鹿児島県の志布志地方へと波及している。このほか、高坏形土器、器台形土器にも安国寺式土器の影響が見られる。

これに対してセットとして伴出している多数の甕形土器については趣を異にしている。安国寺式系の甕形土器は、宮崎平野の中央部から多数出土しており、その器形の特色は、まず、底部が丸底か、平底を呈し、口径が肩部最大幅より狭いのが普通であり、口縁部くの字形外反の頸部からの屈折角度がシャープである。また、色調が一般に赤褐色を呈している。これに対して大萩出土の甕形土器は、図や写真のように、肩部の張りがぐっと弱くなり、そのため口径が肩部の最大幅と同長かあるいは、口の開きの方が大きくなっている。それに底部は裾開がりの上げ底が普通である。また、口縁部のくの字形外反は頸部の屈折角度がシャープでないものがかなり見られる。色調はどちらかと言えば黒っぽい感じで黒褐色とかそれに近い色を呈し、器面の仕上げも一般的に荒い。このような甕形土器は小林市からえびの市、また、串間市から志布志町へと分布しているとみられる。この甕形土器の特色からみてその根源は前期末に波及した下城式土器にあると思われる。この土器は、宮崎平野の中央部で中期前半頃まで使用されていたがやがて西瀬戸内系土器等の影響を受けて成立した中溝式土器[4]に受けつがれている。この土器は大部分が相変わらず肩部に刻目突帯や断面三角形の突帯を付しており、一般に下城式土器より厚手仕上げになっている。

口縁部はくの字形に外反し口径は肩部最大幅より大きい。底部は腰高くほとんどが裾開きで上げ底が多い。この土器も後期前半頃に姿を消している。次に中溝式土器と大萩の甕形土器とを結ぶ土器として注目されるのが宮崎赤江出土の甕形土器である。裾開きの上げ底でしかも調整が十分行なわれないまま焼き上げられており、その手法も大萩の土器とよく似ている。

このように、この大萩の甕形土器のみについてみると宮崎平野部で成立したと思われる中溝式土器の強い影響がうかがわれる。さらに、この土器は成川式土器の甕ともよく似ており、その関連についても十分検討する必要がある。

このほかの特色としては、普通の長頸壺が住居址内から出土しているのに対して昨年、土壙墓の供献土器として多数発見された免田式の長頸壺（重弧文）が１点も発見されなかったことである。本集落の墳墓とみられる土壙墓からこの土器が発見されたことは、免田式土器が日用雑器ではなく、祭祀用の土器、つまり死者に捧げる供物を入れた供献土器として最初から造られたものといえよう。

免田式土器の東方への分布をみると、大淀川を下り東諸県郡国富町六野原、宮崎郡清武町加納、宮崎市黒迫町等があげられ、宮崎市内まで及んでいる。

最後に、今回の調査で、昨年発掘された土壙墓の築造者と思われる人達の集落が明らかにされたことは大きな収穫であって、その両者の関係についての本格的な追求は重要であり、かつ必至であるが将来の課題であることを付記しておきたい。

（田中　良）

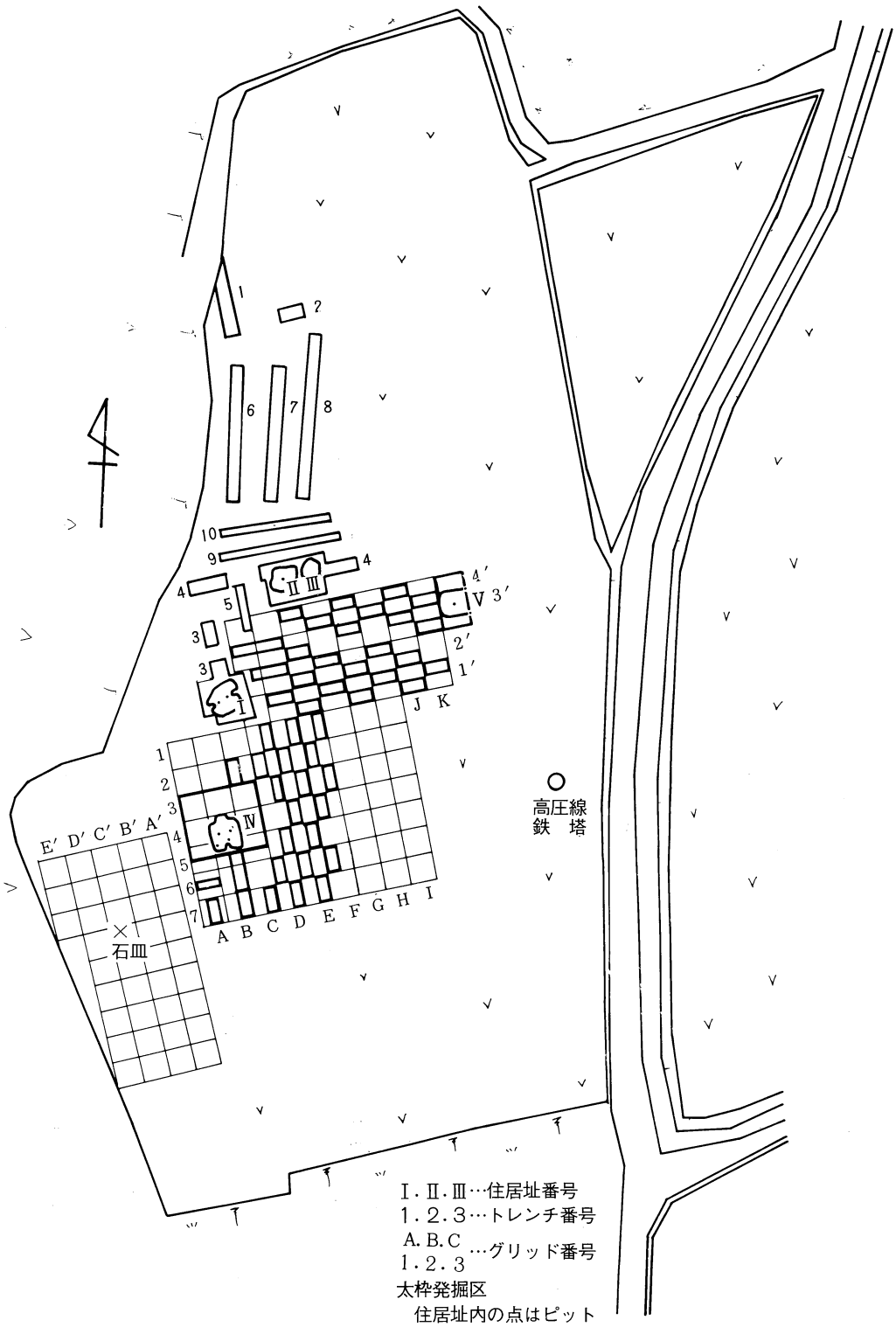
(註)

① 宮崎市橲遺跡から発見された石畳状の遺構群について石川恒太郎氏は敷石住居址群としているが、森貞次郎氏は、積石墓群としており、両者の見解が異なり定説化されていないのでここではとり上げなかった。

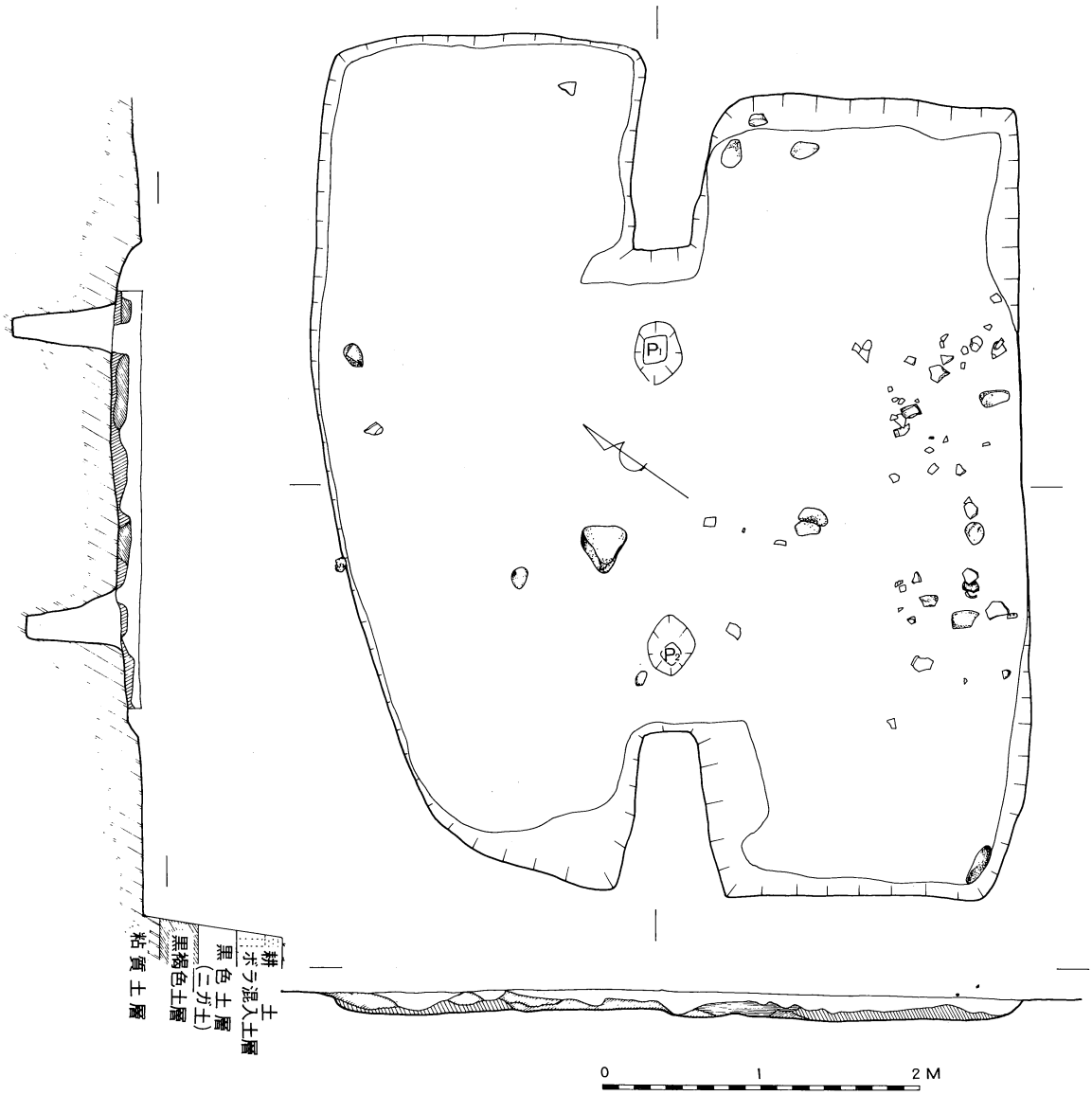
② 「大分県国東町安国寺弥生式遺跡の調査」(九州文化総合研究所 昭.33.3.20)

③ 石川恒太郎「高鍋町牛牧弥生期住居跡調査報告」<宮崎県文化財調査報告書第16集> (宮崎県教育委員会 昭.47.3) 所収

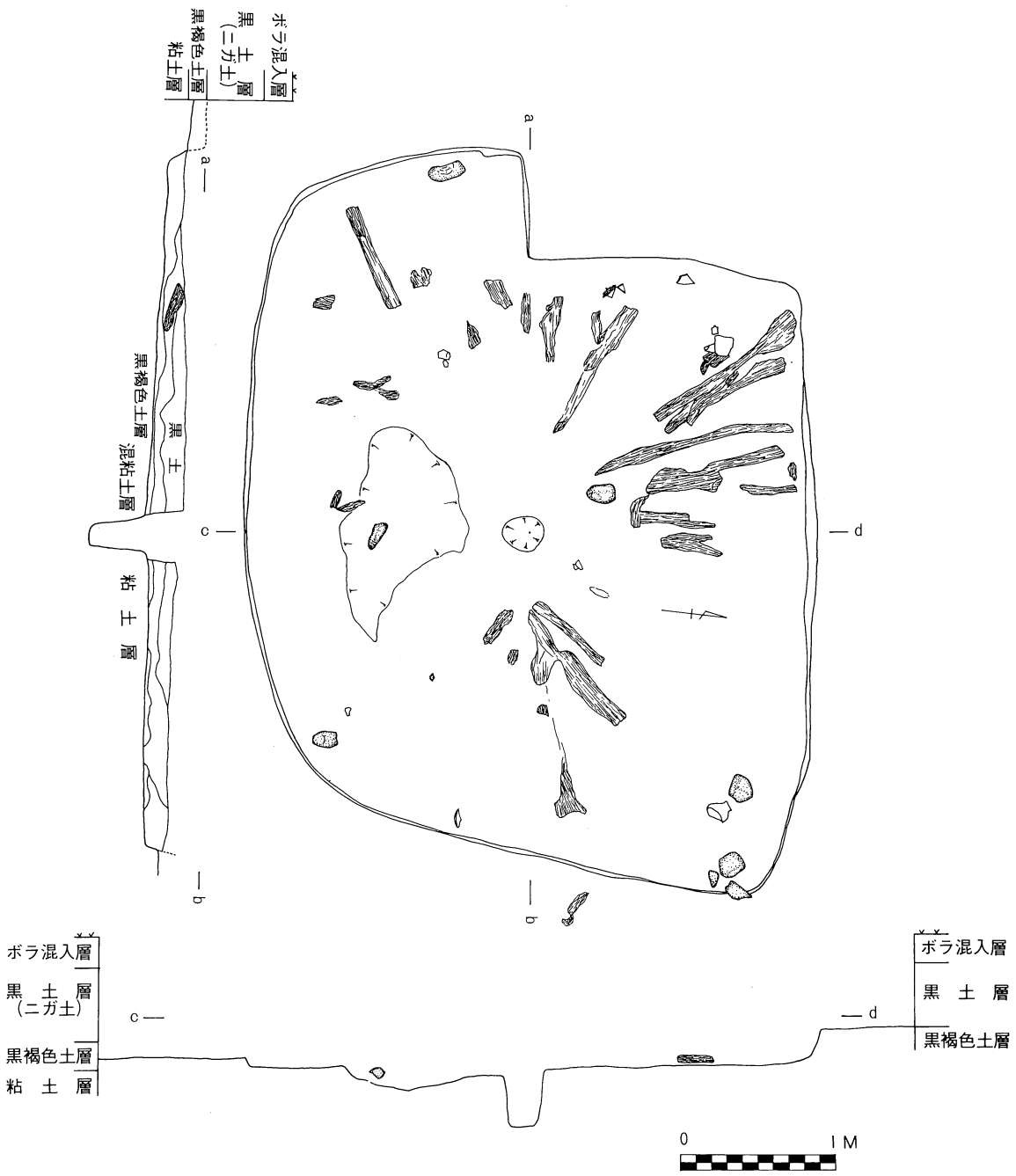
④ 田中茂「宮崎県出土の丹彩袋状口縁壺形土器について」<宮崎県総合博物館紀要第3輯> (宮崎県総合博物館 昭.50.3.31) 所収


1
2
6
7
8
10
9
4
5
3
Ⅱ Ⅲ
Ⅴ
4′
3′
2′
1′
J K
Ⅰ
Ⅳ
A B C D E F G H I
E′ D′ C′ B′ A′
石皿
高圧線
鉄 塔
Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ…住居址番号
1.2.3…トレンチ番号
A.B.C …グリッド番号
1.2.3
太枠発掘区
住居址内の点はピット
0 10 20 m

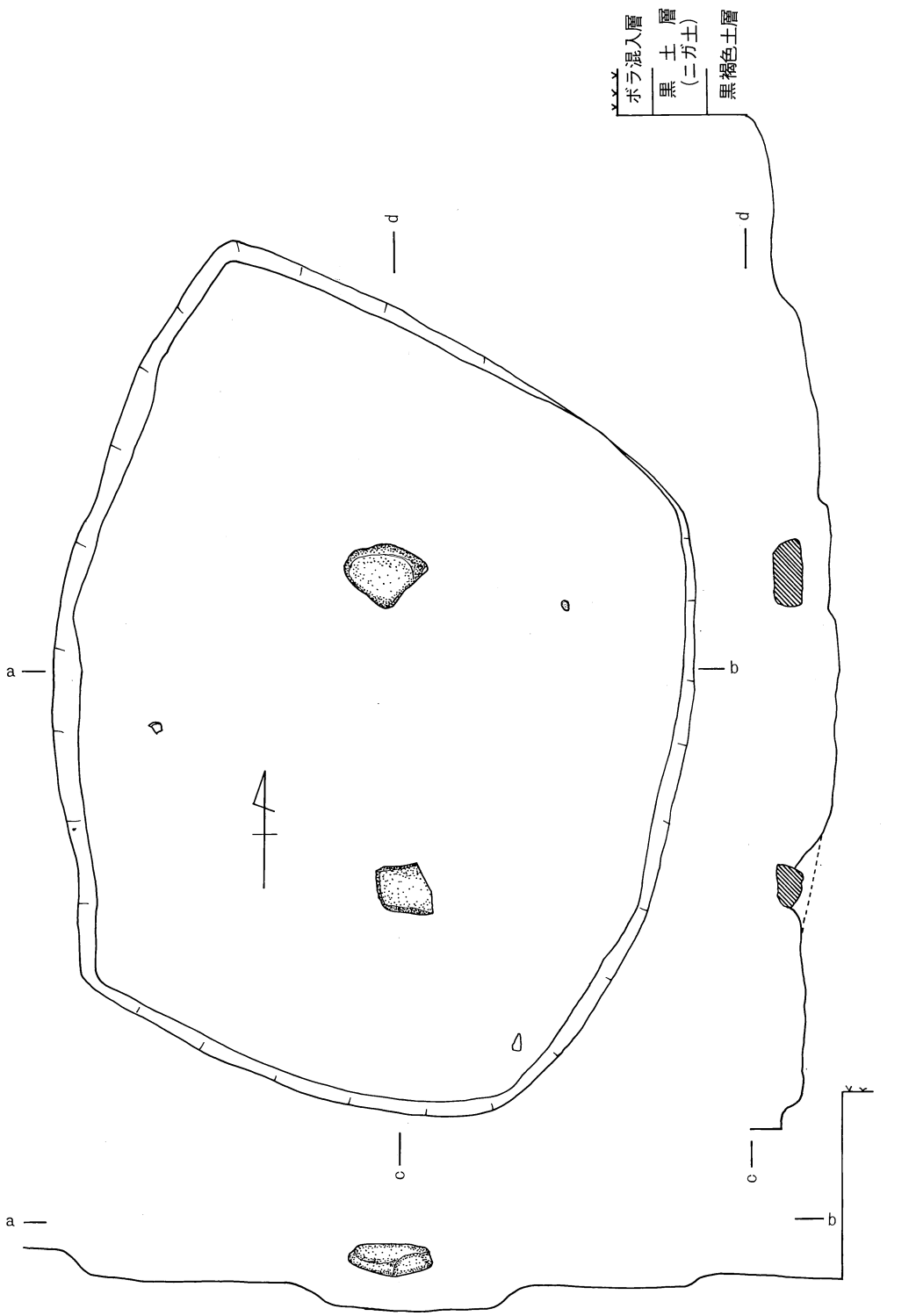
第2図　G地区全体図




第３図　１号住居址実測図

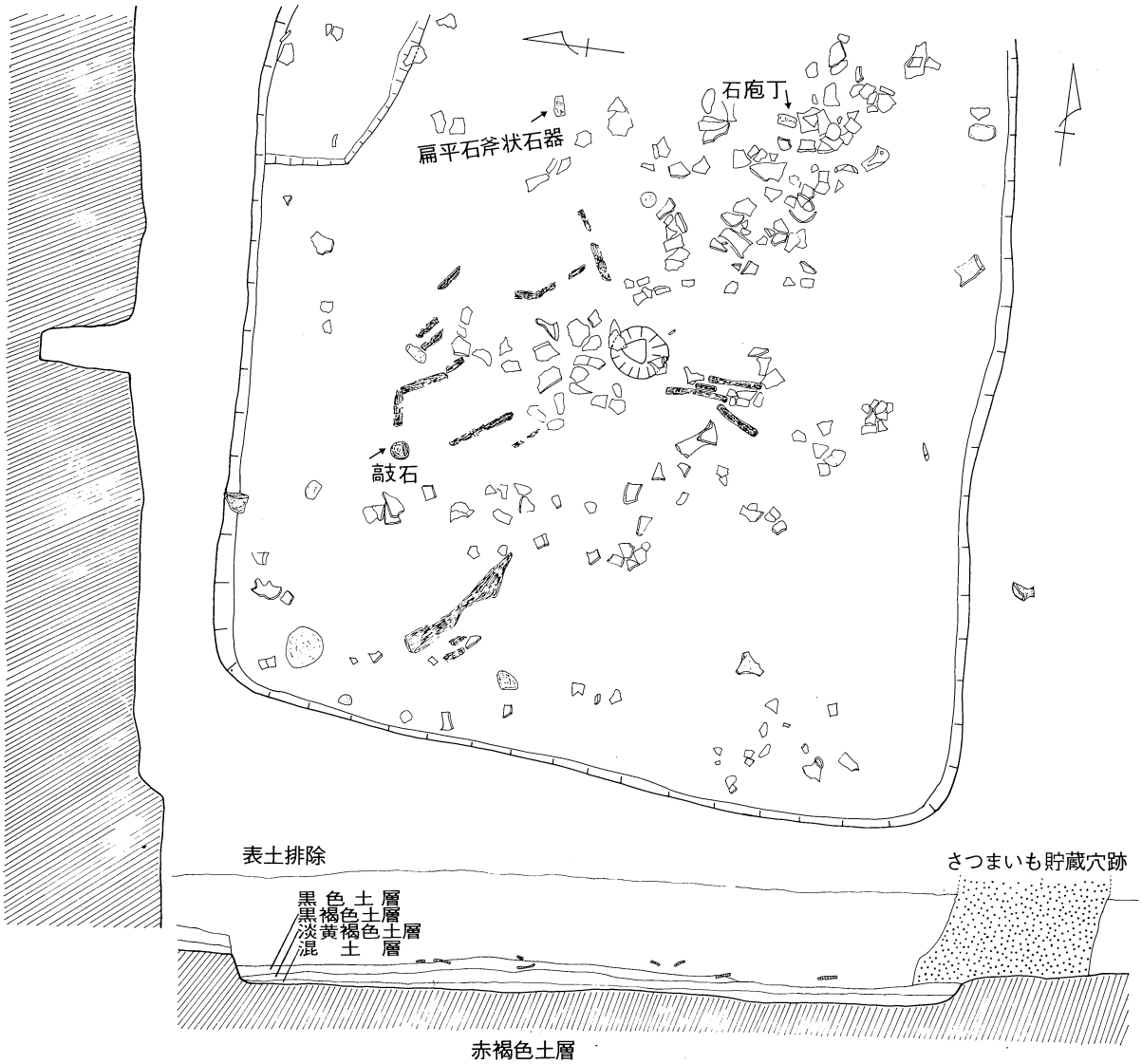



第4図　2号住居址実測図

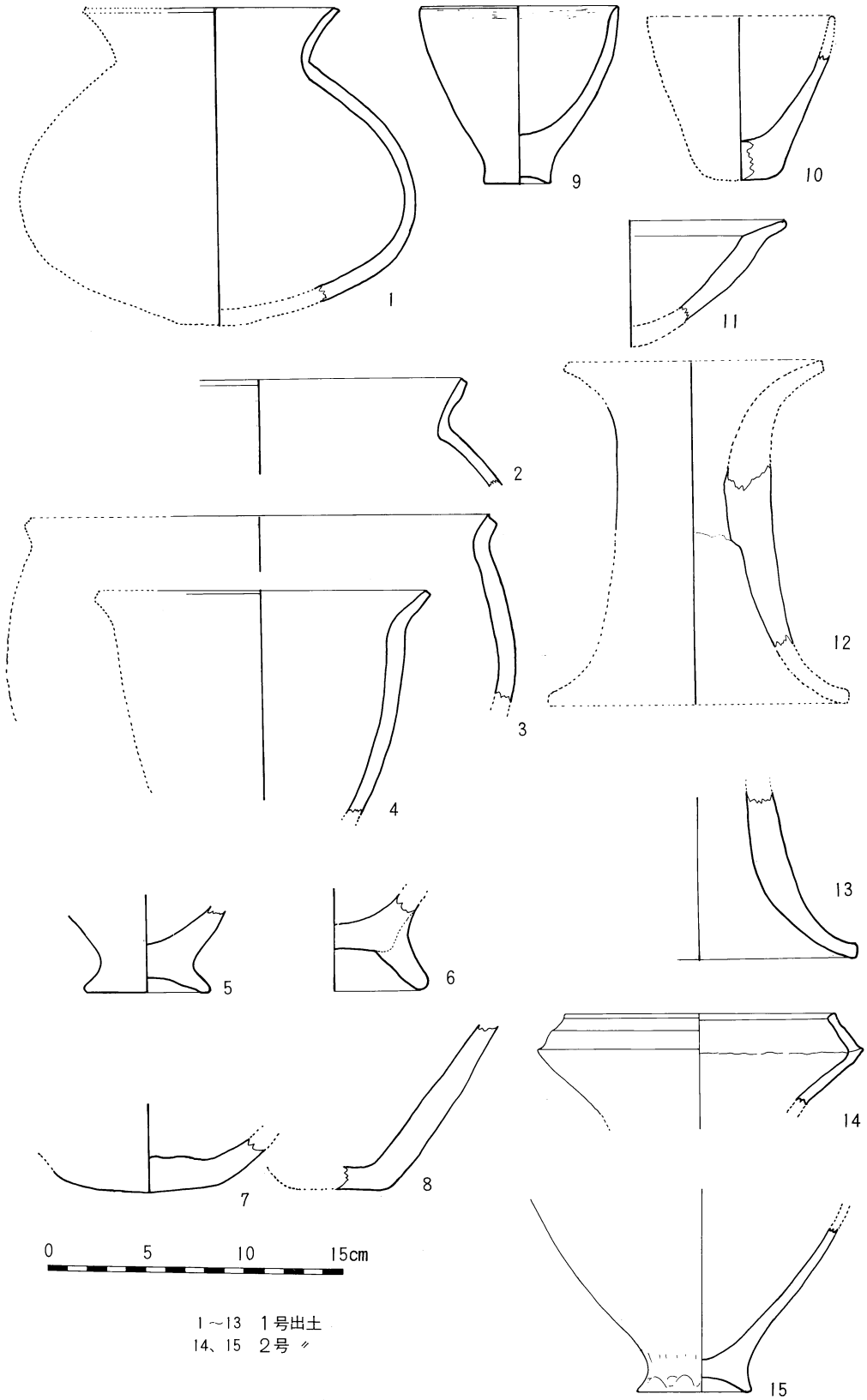



第5図　3号遺構実測図

第6図　4号住居址実測図

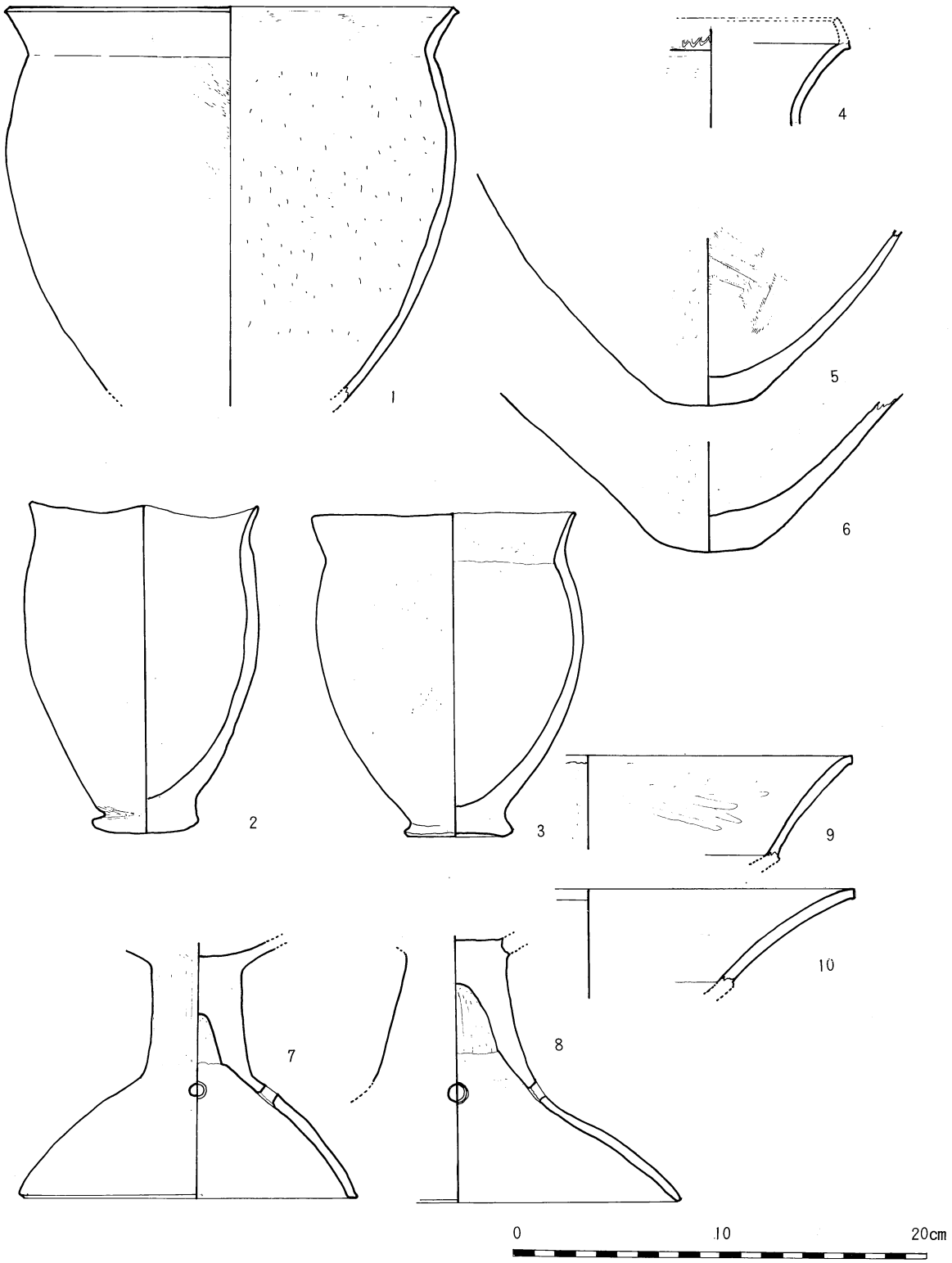



第７図　５号住居址実測図

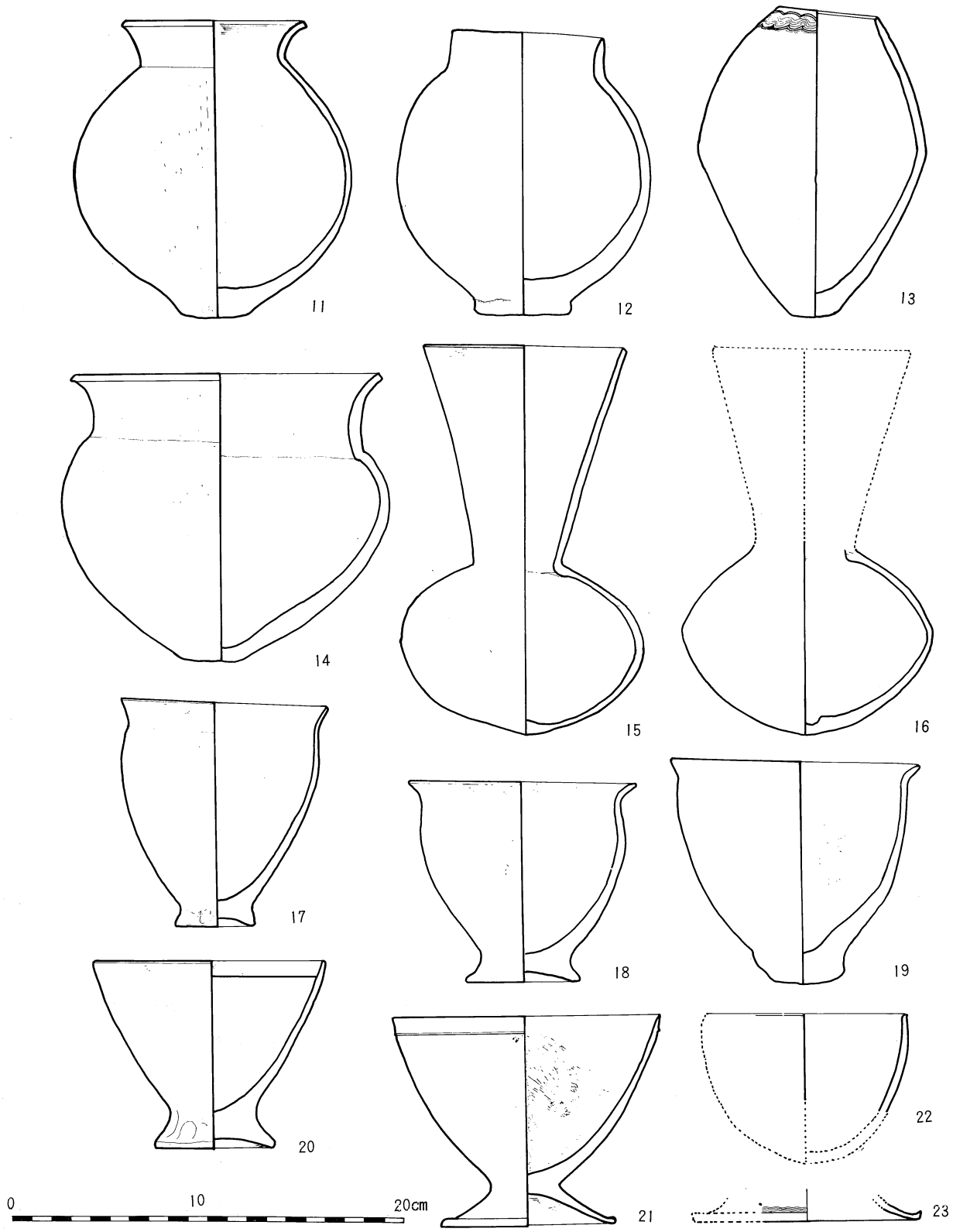



1～13　1号出土
14、15　2号〃

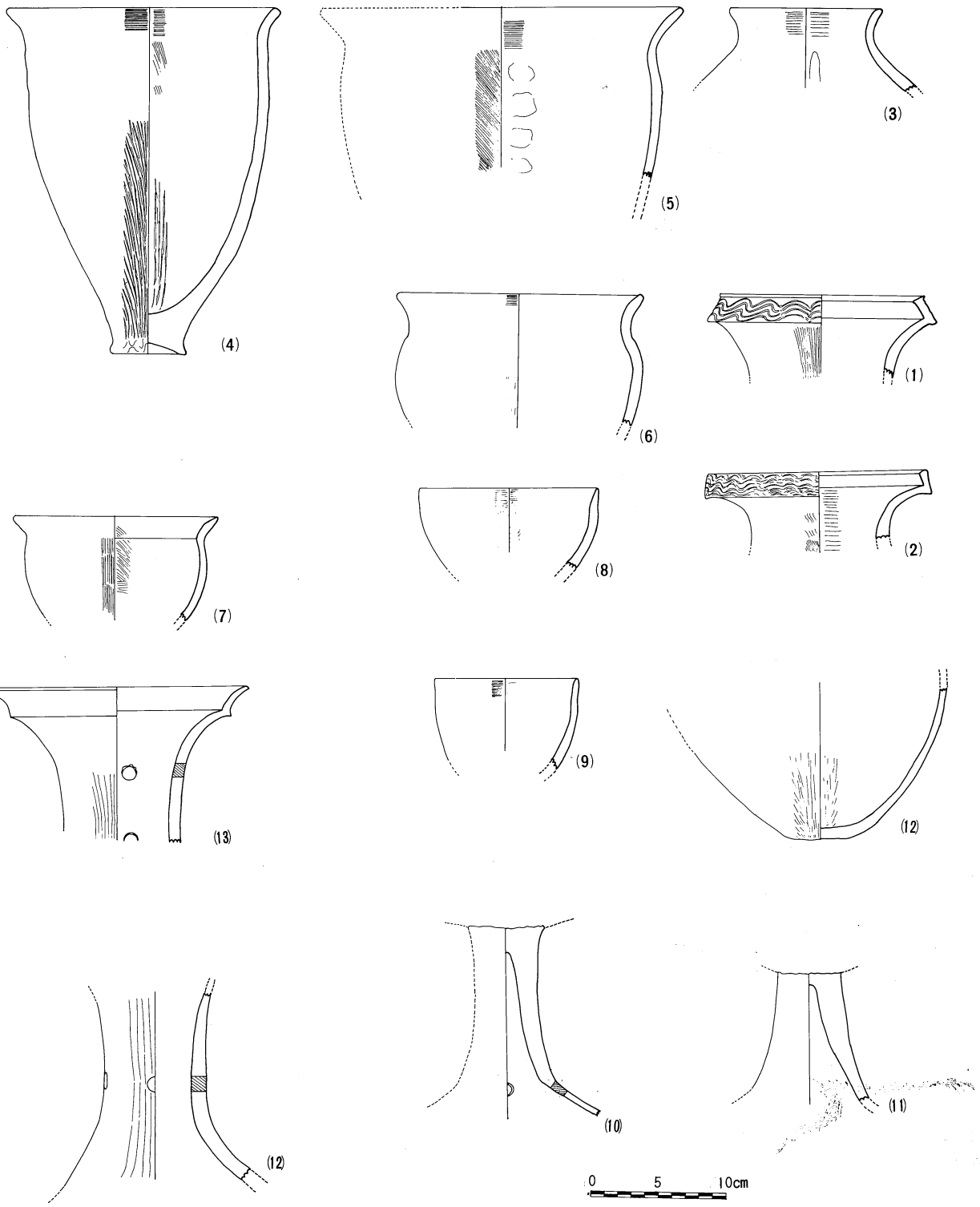
第8図　1、2号住居址出土土器実測図



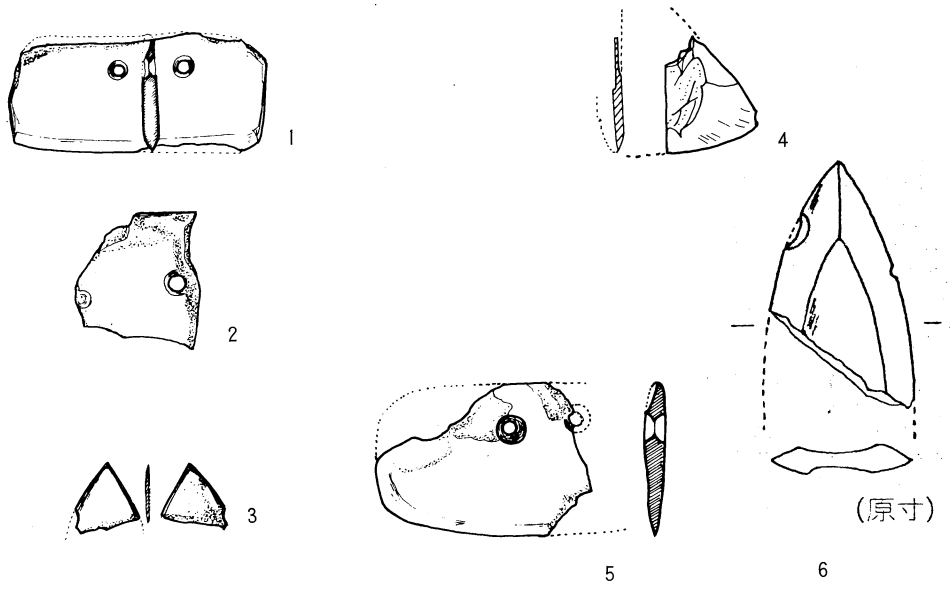

第９図　４号住居址出土土器実測図(1)

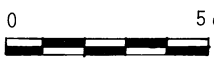


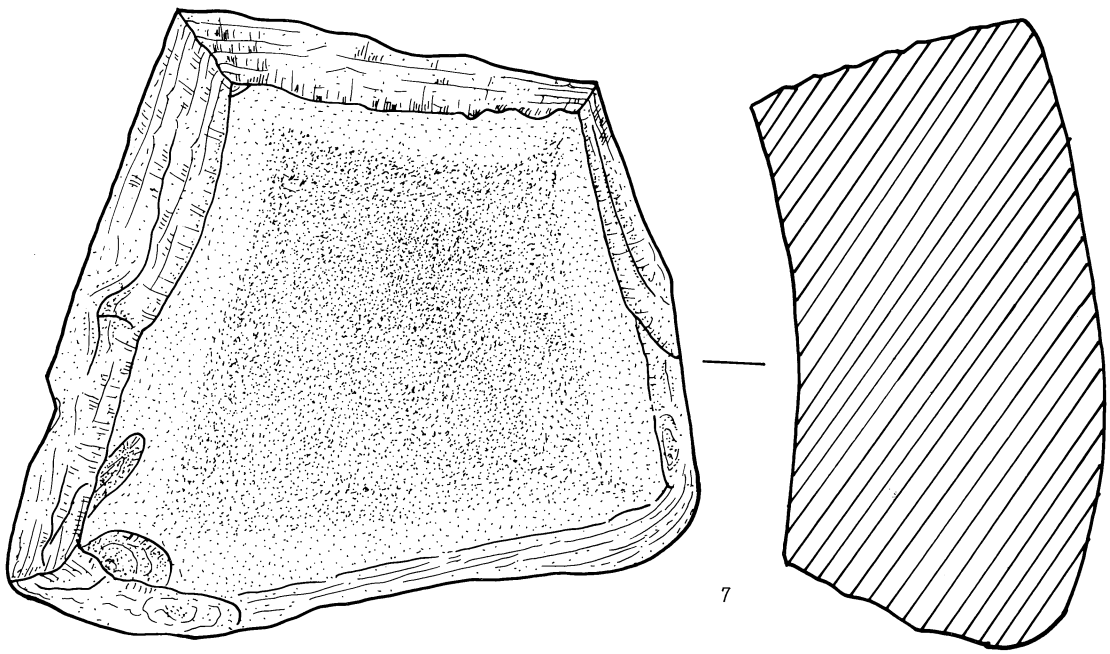

第10図　４号住居址出土土器実測図(2)

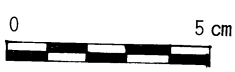



第11図　５号住居址出土土器実測図



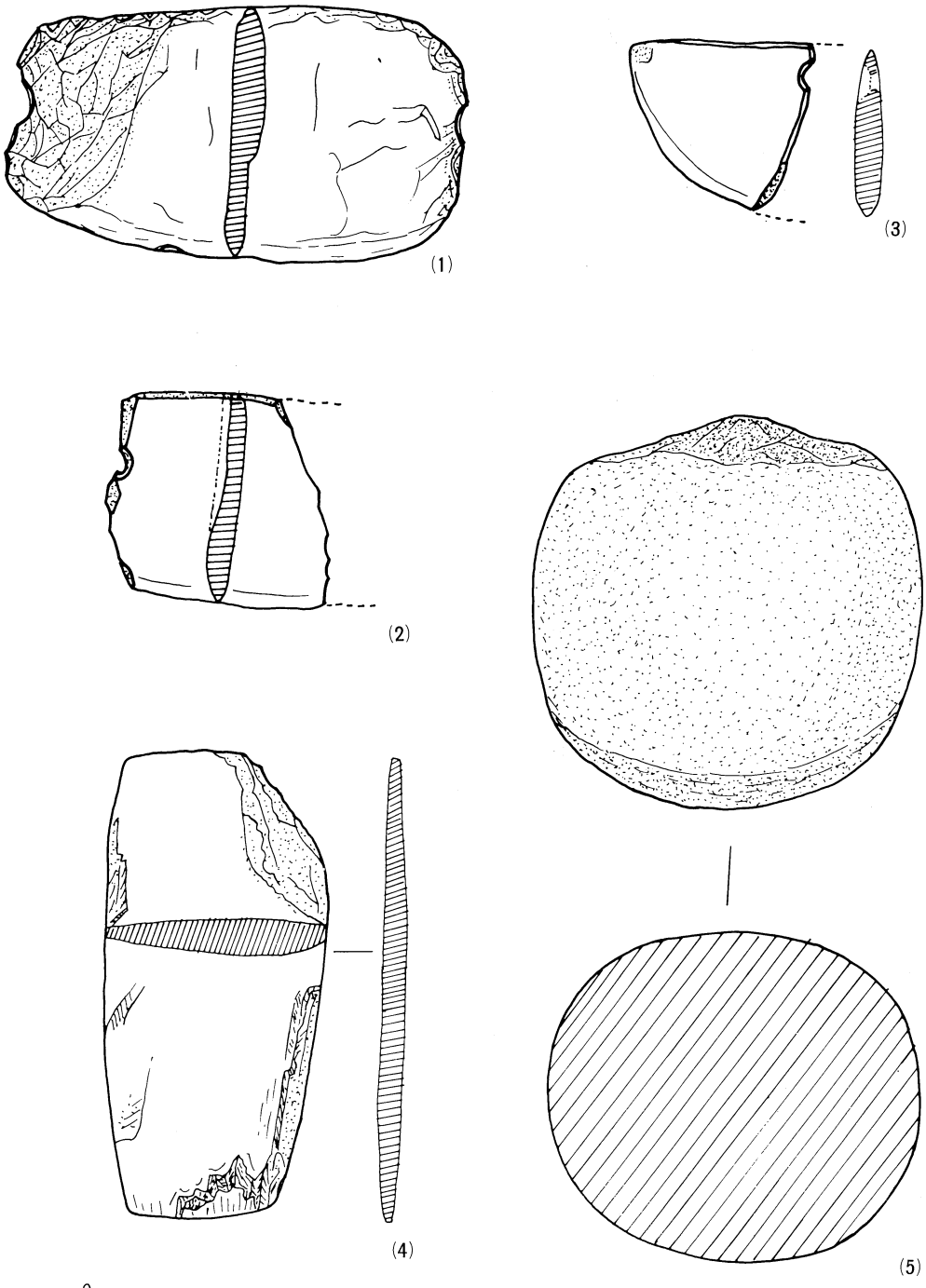



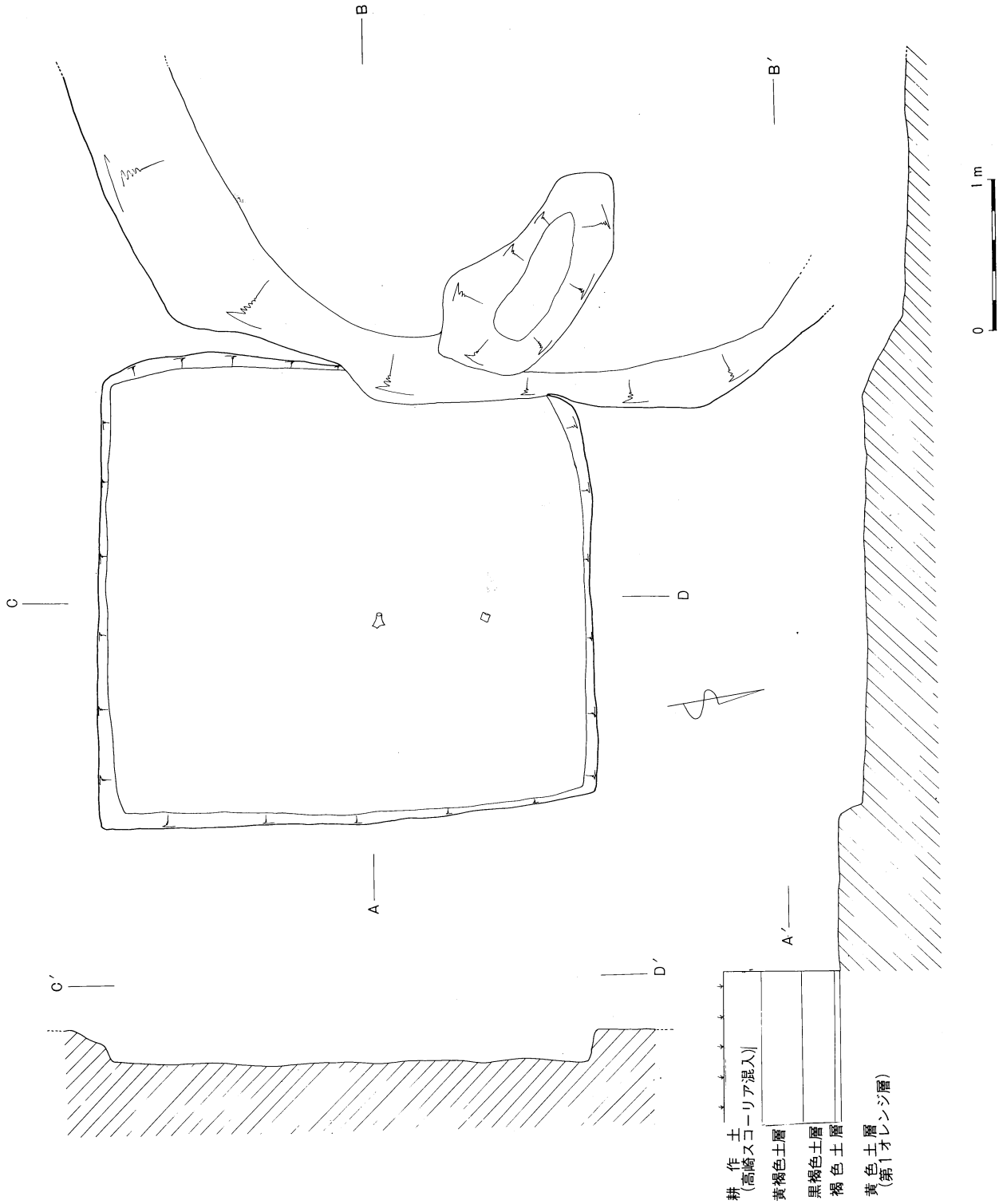

1．2　1号住居址出土石庖丁
3　〃　石鏃
4　2号　〃　石庖丁
5　4号　〃　〃
6　〃　〃　石鏃
7　4号住居址西側出土石皿

第12図　1．2．4号住居址出土石器実測図

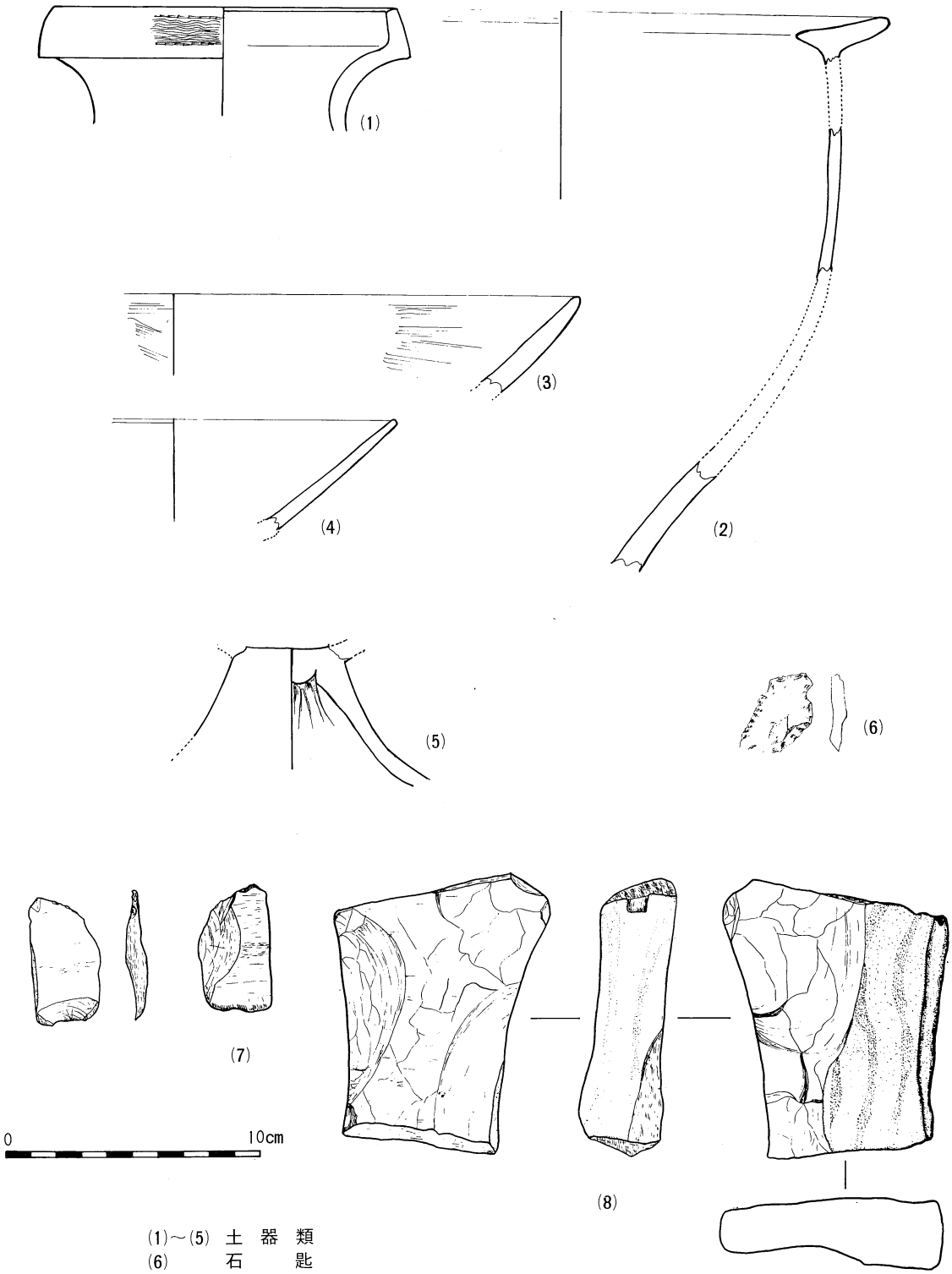



第13図　５号住居址出土石器実測図

第14図　H地区平面図




第15図　H地区遺構実測図

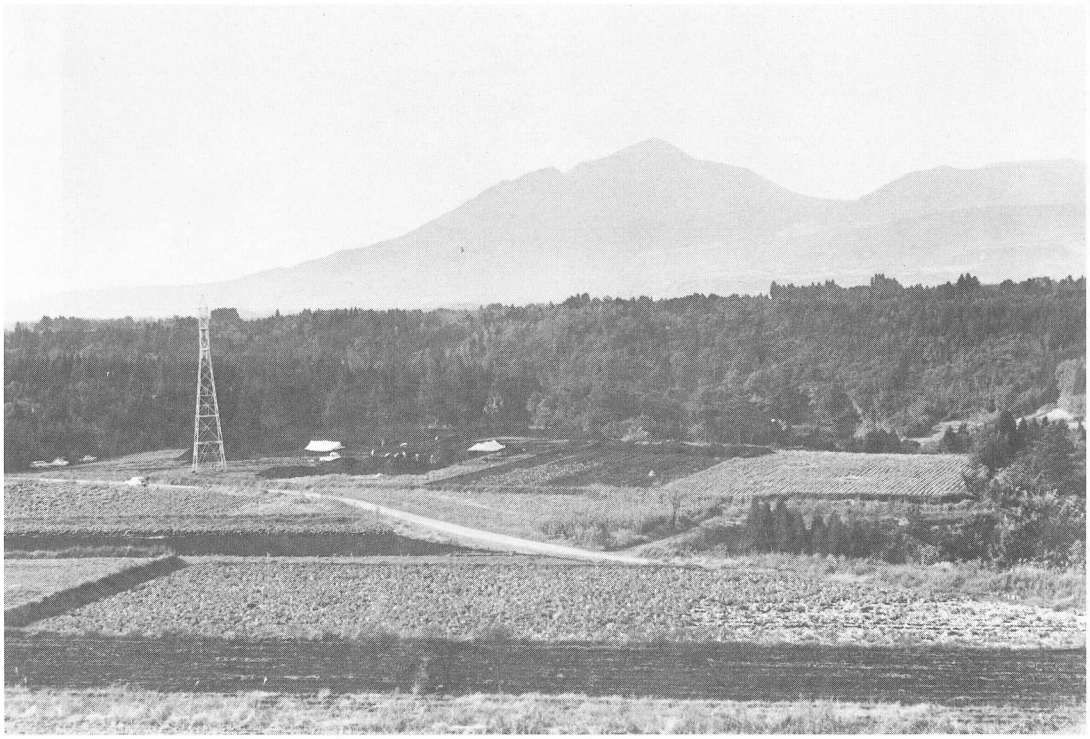



(1)～(5)　土　器　類
(6)　　石　　匙
(7)　　第１号遺構出土のみ形石器
(8)　　第２号　〃　　砥石

第16図　Ｈ地区出土遺物実測図

# 図版

図版1

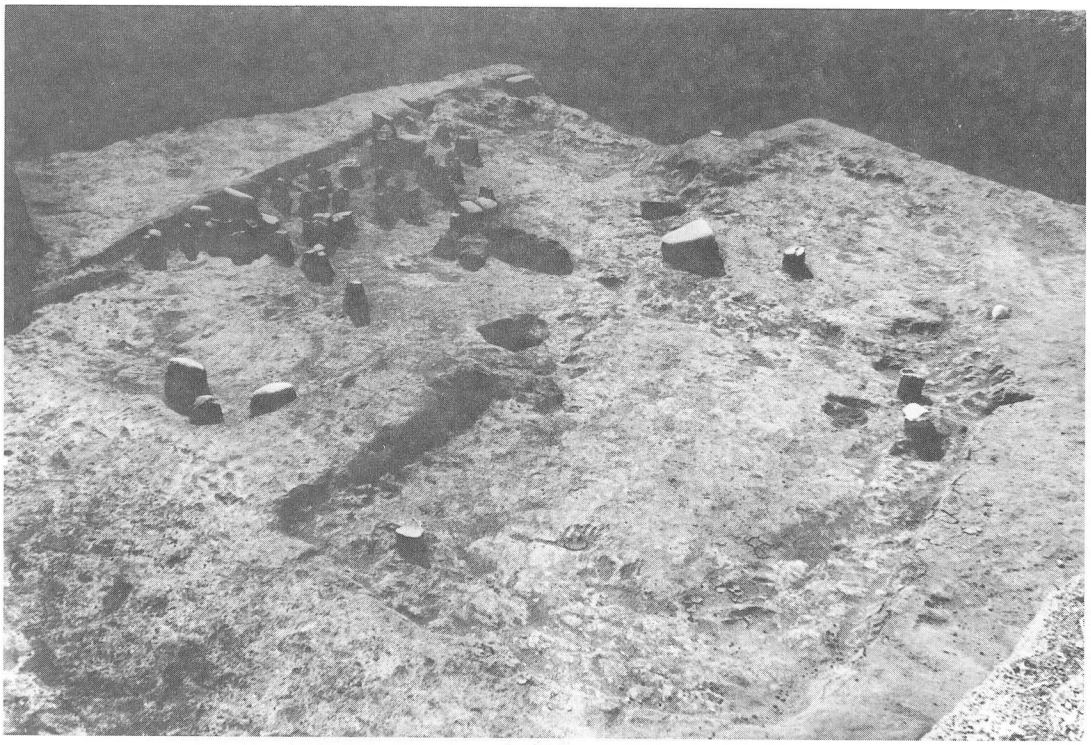


G 地区遠景

図版2

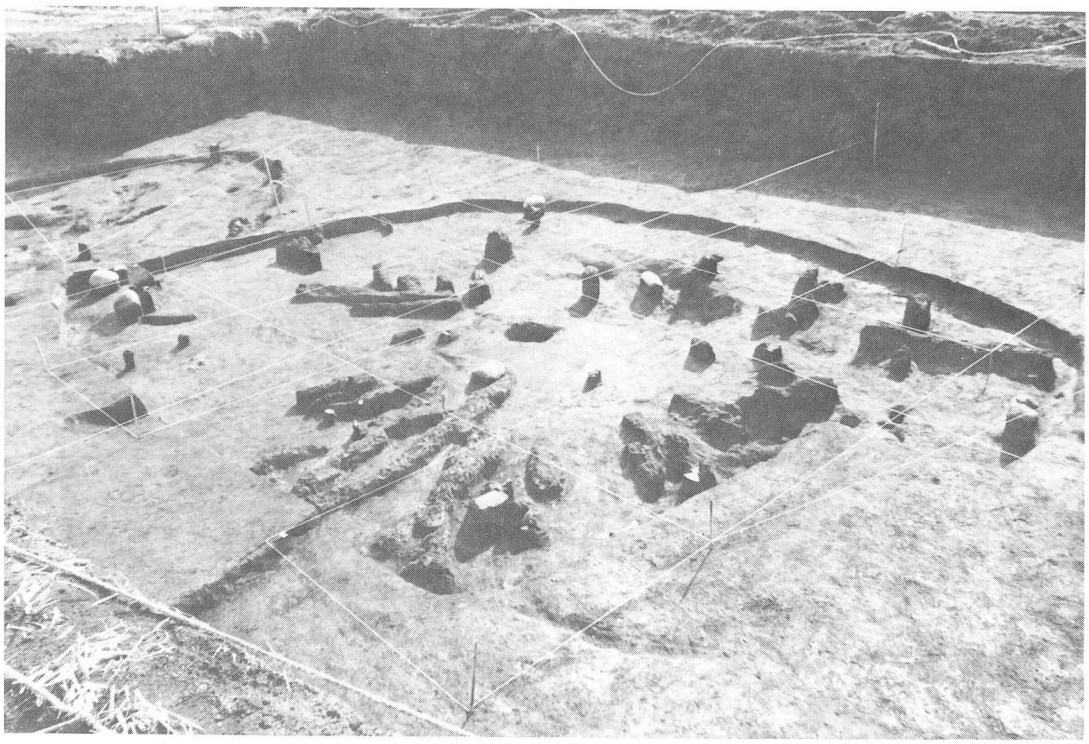
G 地区発掘状景

図版3



1号住居址

図版4



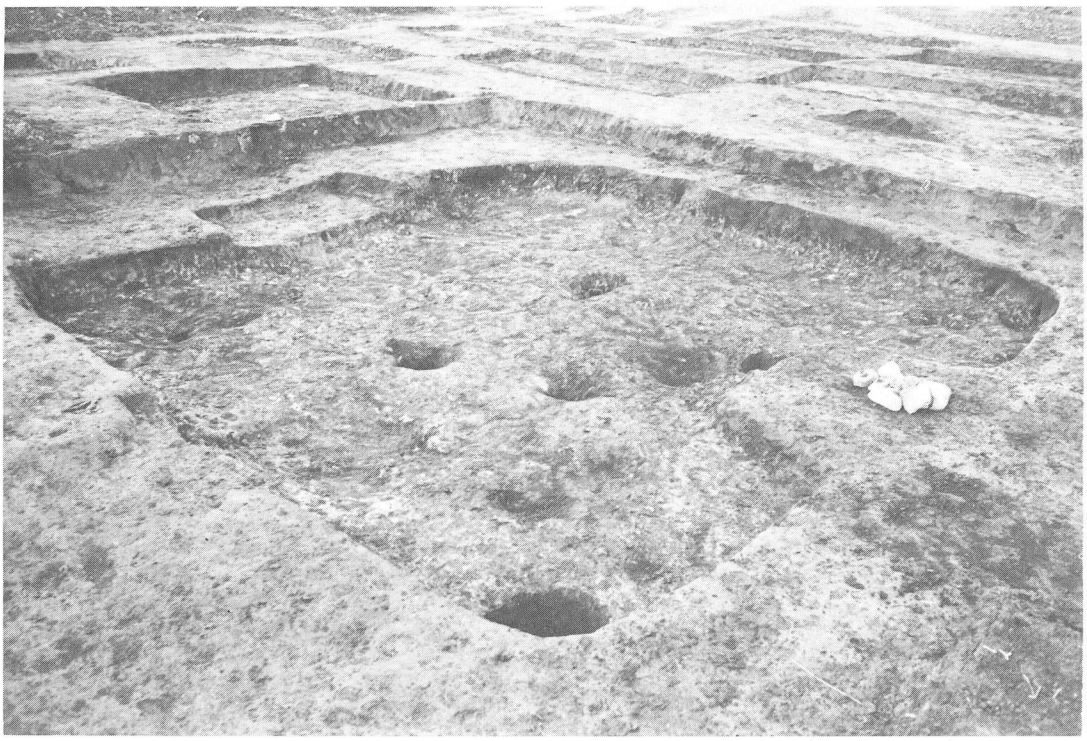
3号遺構

2号住居址

図版5

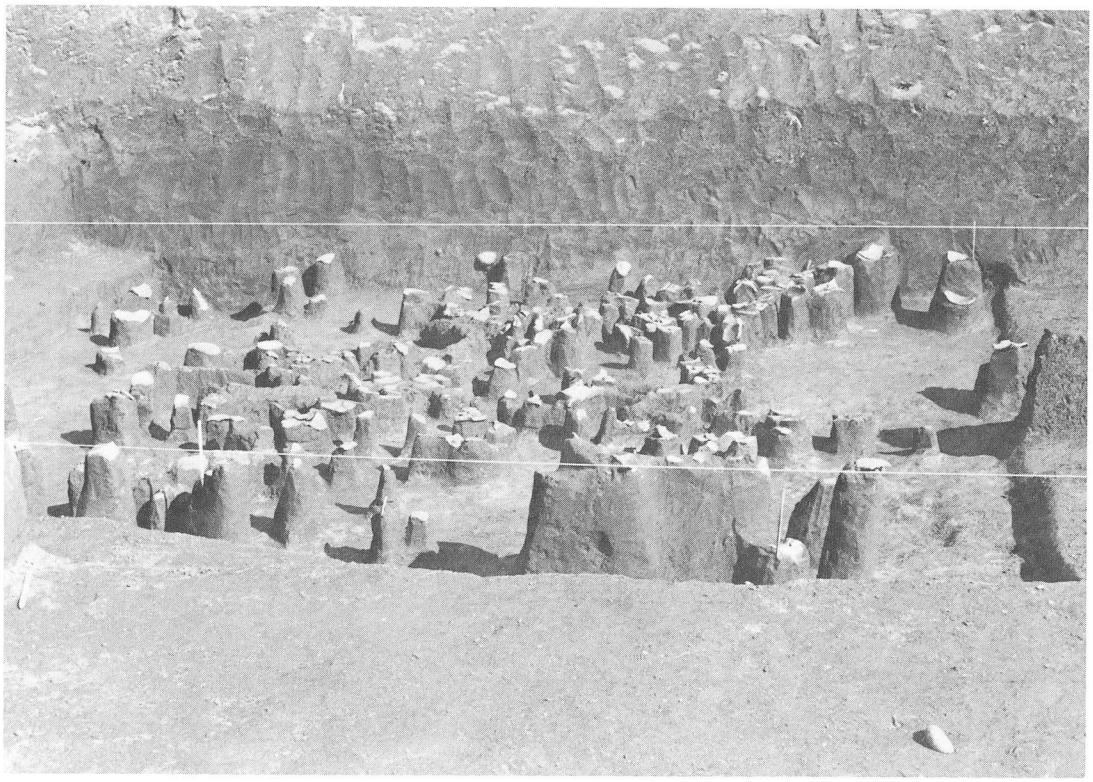
4号住居址

図版6



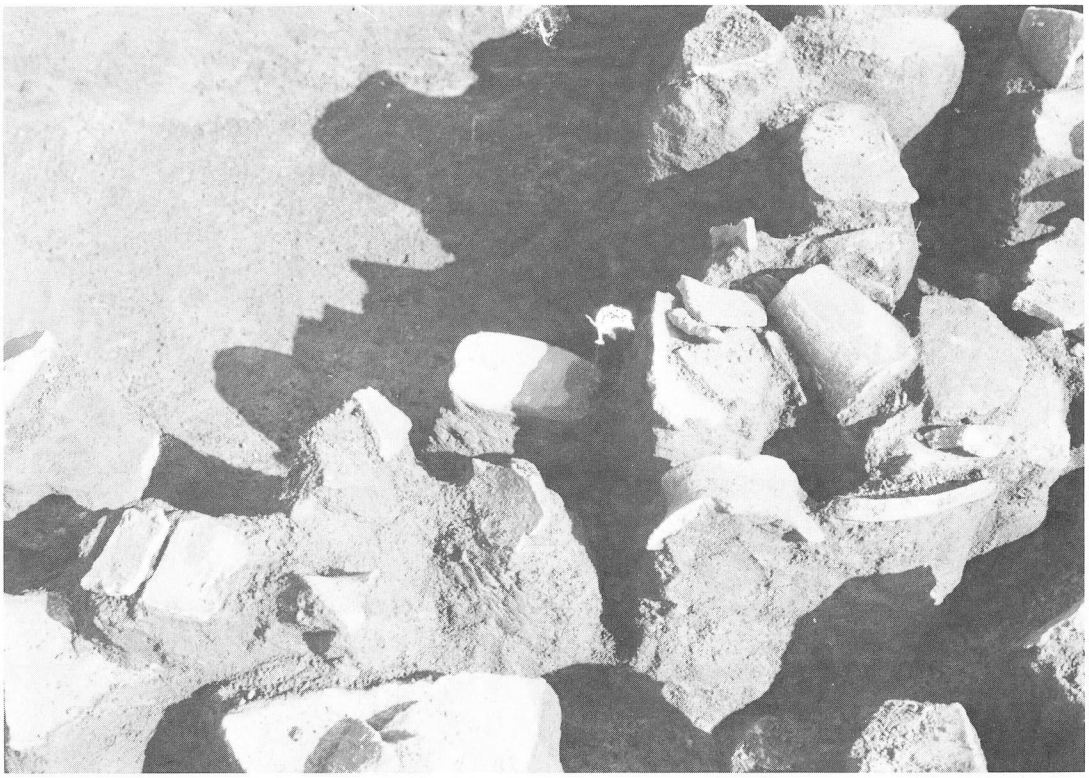
4号住居址（清掃後）

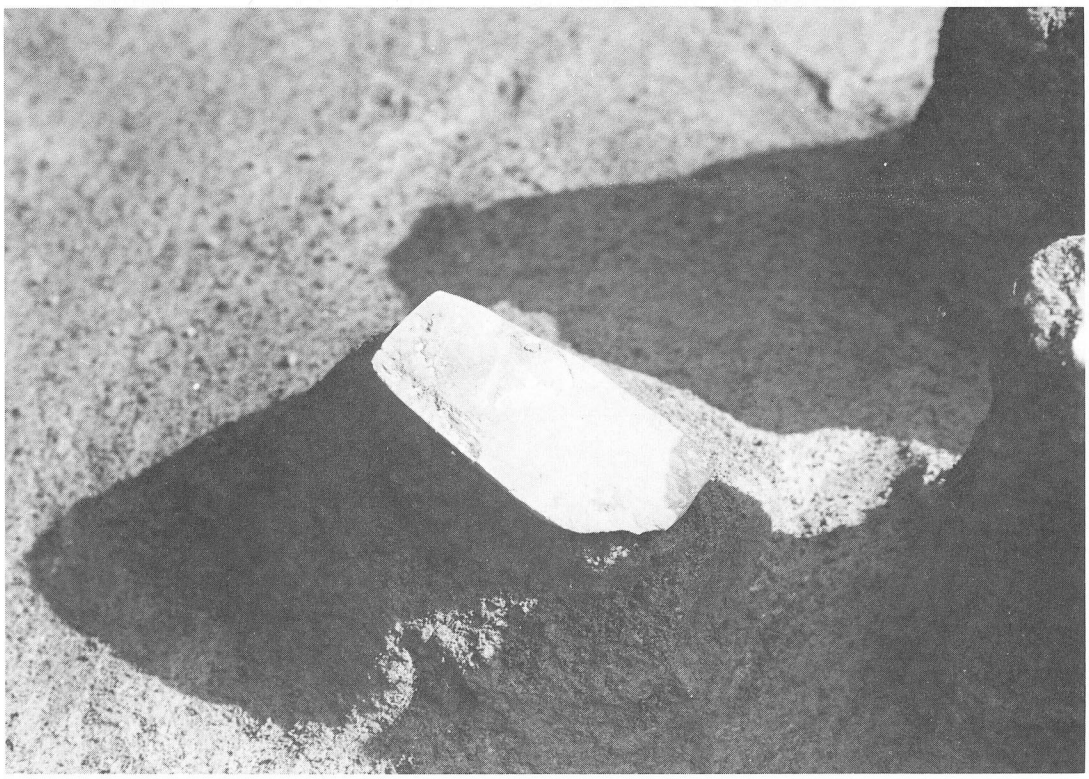
図版7



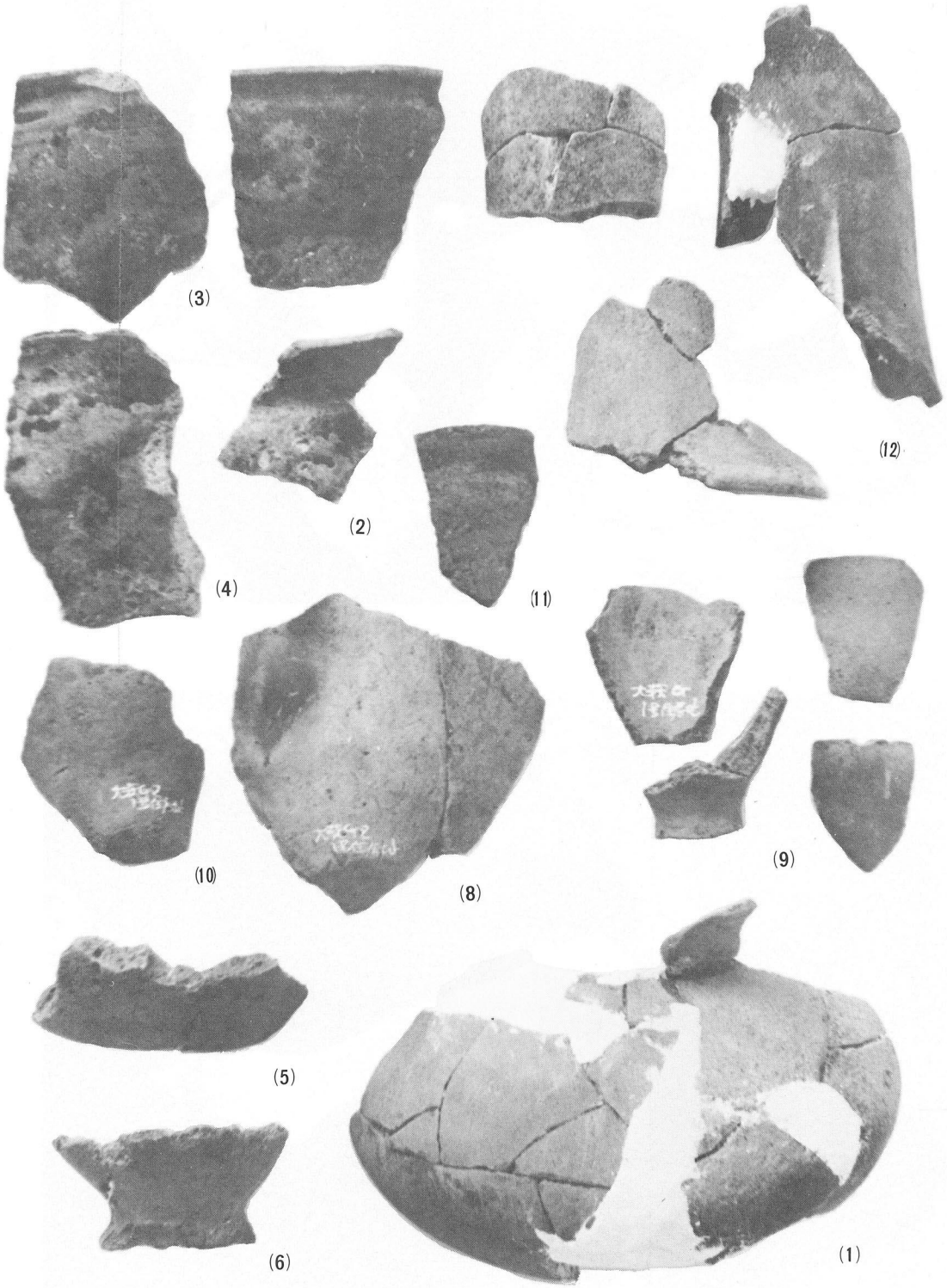
5号住居址（西側から撮影）

5号住居址（東南側から撮影）

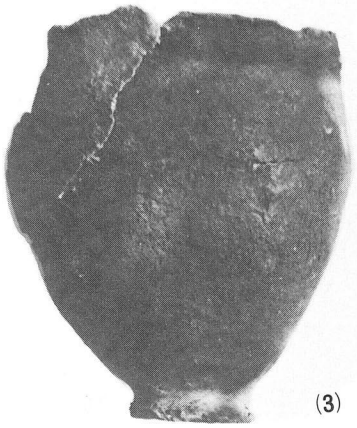




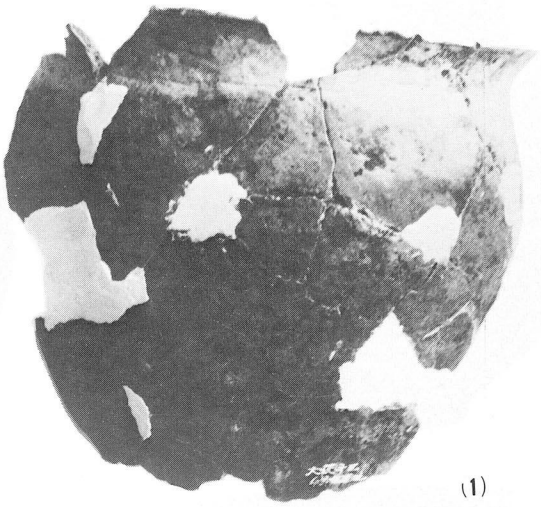
5号住居址遺物出土状況



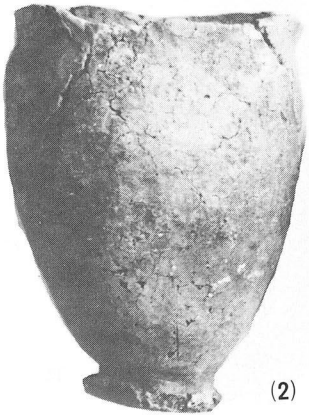

1号住居址土器



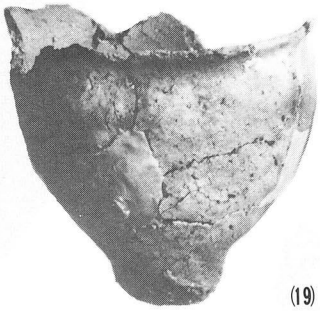
(3)



(1)

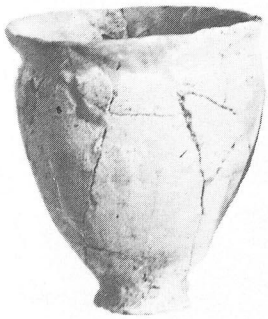


(2)

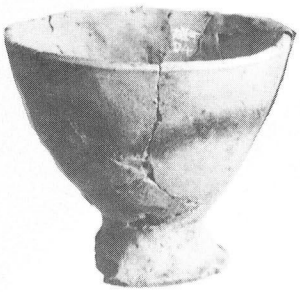


(19)

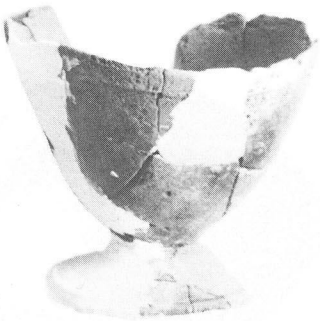
(18)



(17)

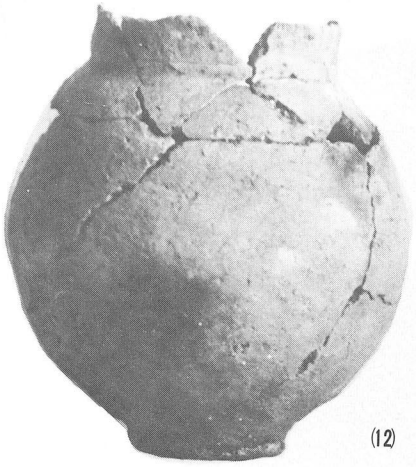


(20)

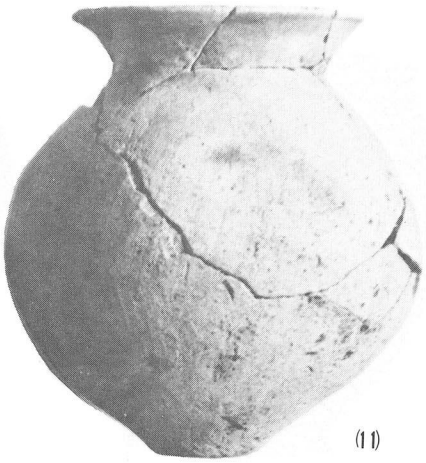


(21)

4号住居址土器(1)

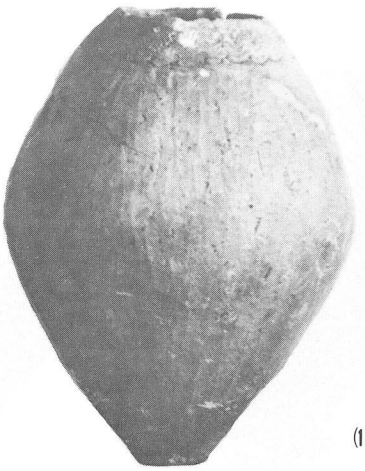


(12)

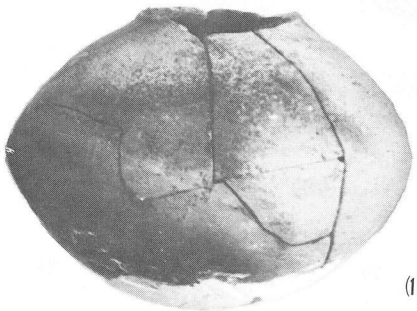


(11)

(15)



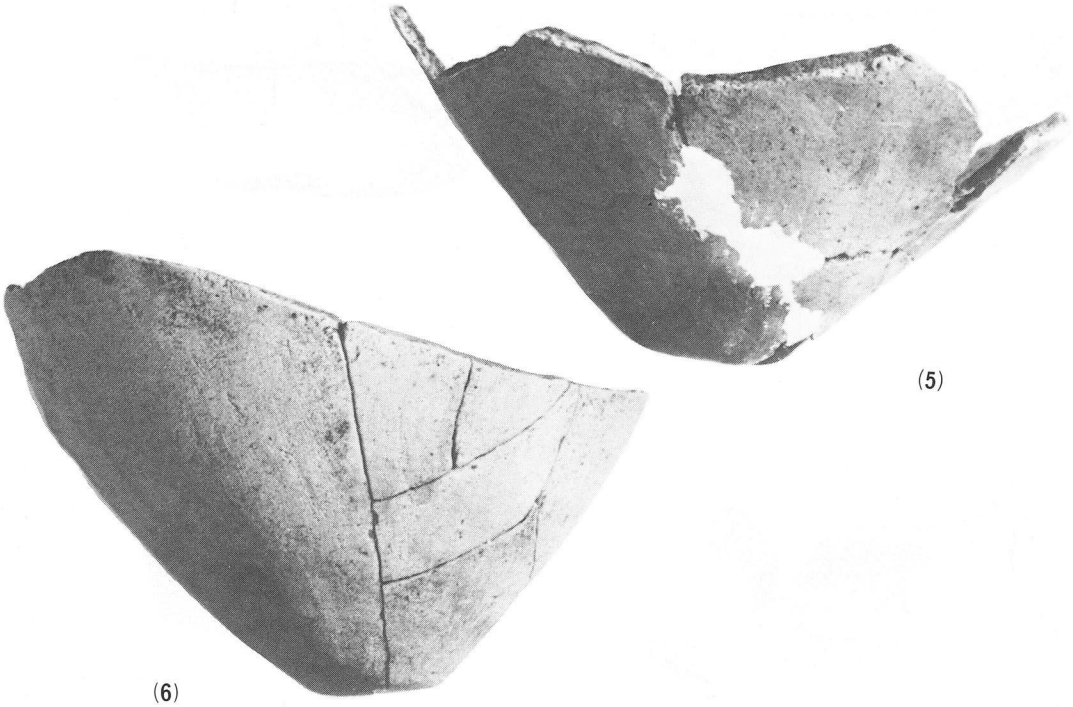
(13)



(16)

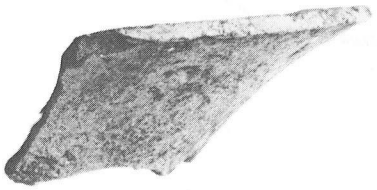
(14)

4号住居址土器 (2)

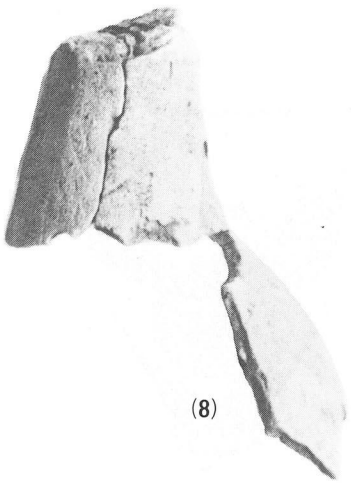


(5)

(6)

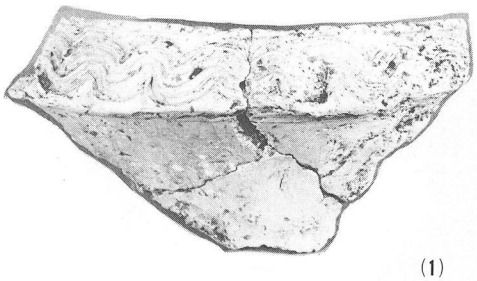


(7)

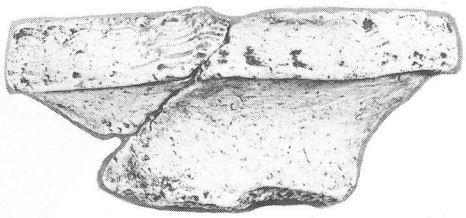


(8)

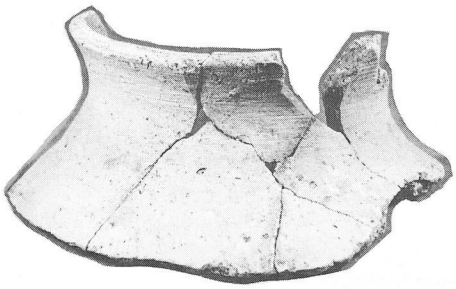
4号住居址土器 (3)



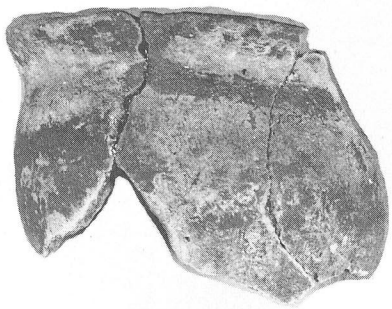
(1)



(2)

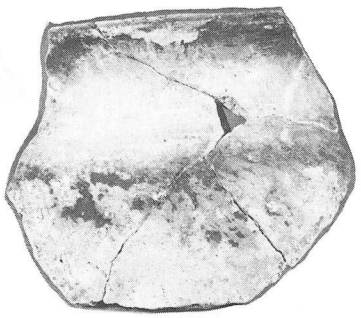


(3)

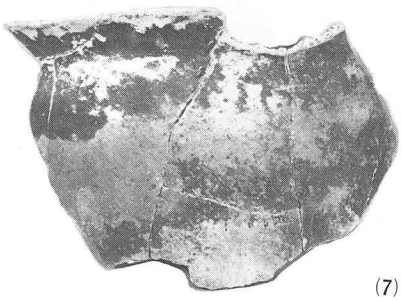


(5)

(4)

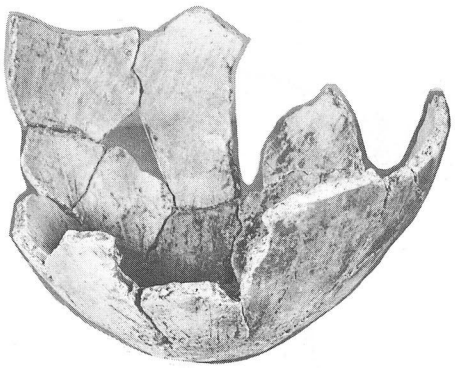


(6)

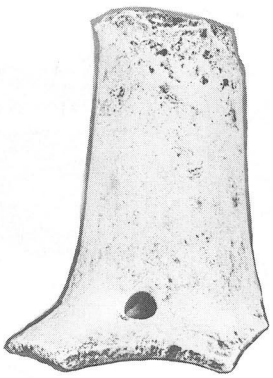


(7)

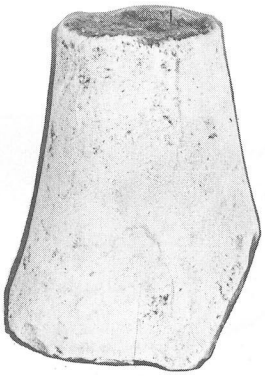
5号住居址土器(1)



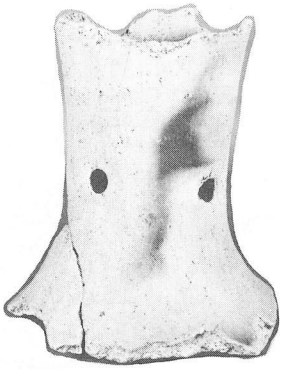
(8)



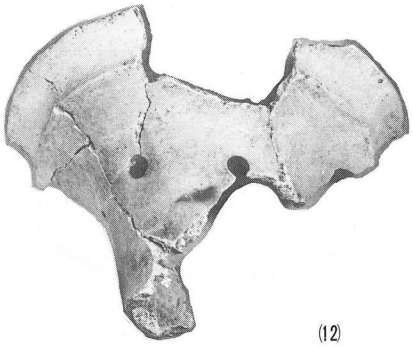
(9)



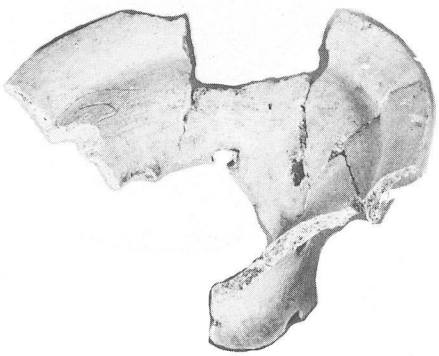
(10)



(11)



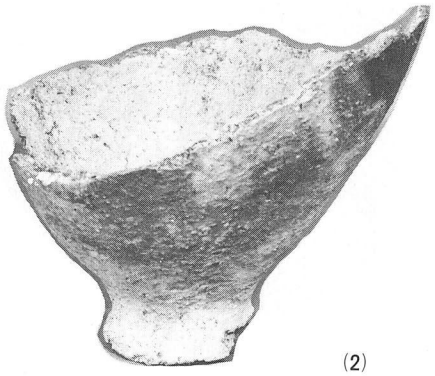
(12)



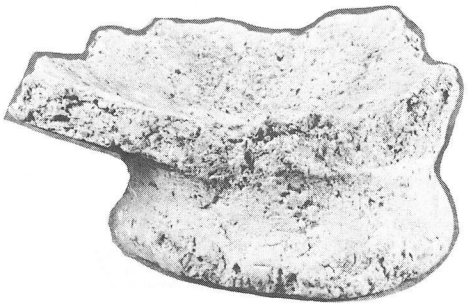
(13)

5号住居址土器 (2)

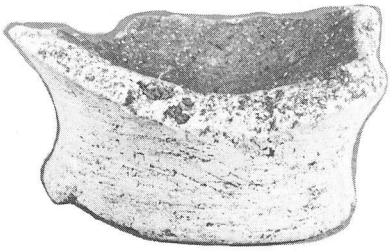
(1)



(2)

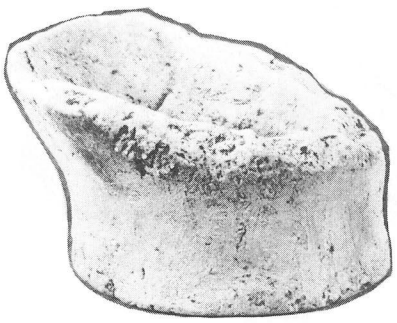


(3)



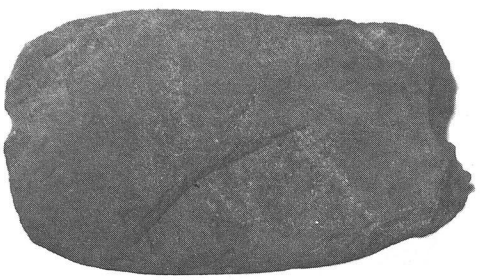
(4)

(5)

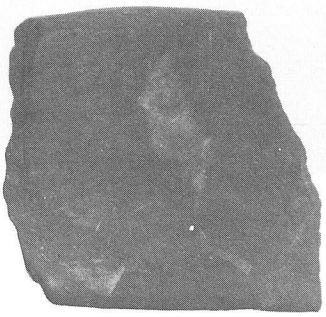


(6)

(1)、(2)　2号住居址土器
(3)、(4)　5号住居址土器の底部
(5)、(6)　〃

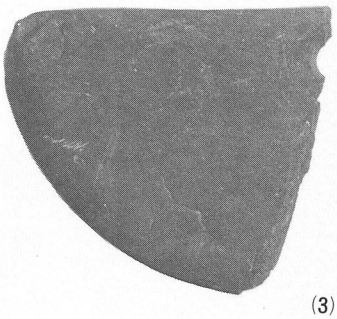


(1)

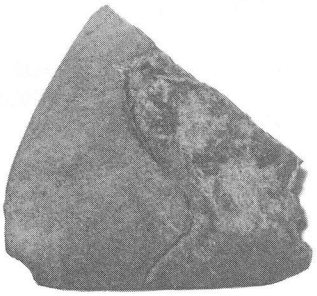


(2)

(4)

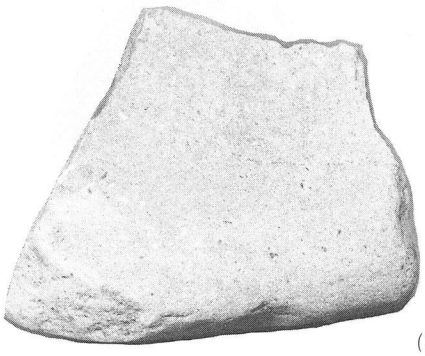


(3)



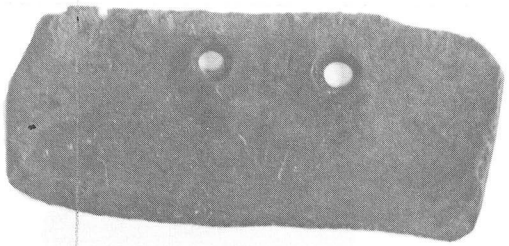
(6)

(5)

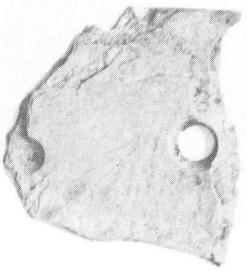


(7)

(1)､(2)､(3)　５号住居址出土石庖丁
(4)　〃　扁平石斧状石器
(5)　〃　敲石
(6)　２号住居址出土石庖丁
(7)　４号西側出土石皿

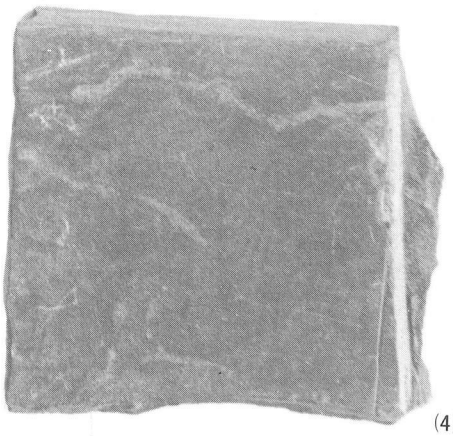


(1)

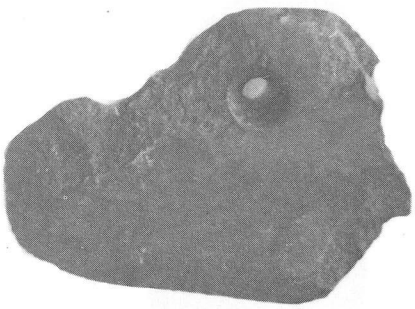


(2)

(3)



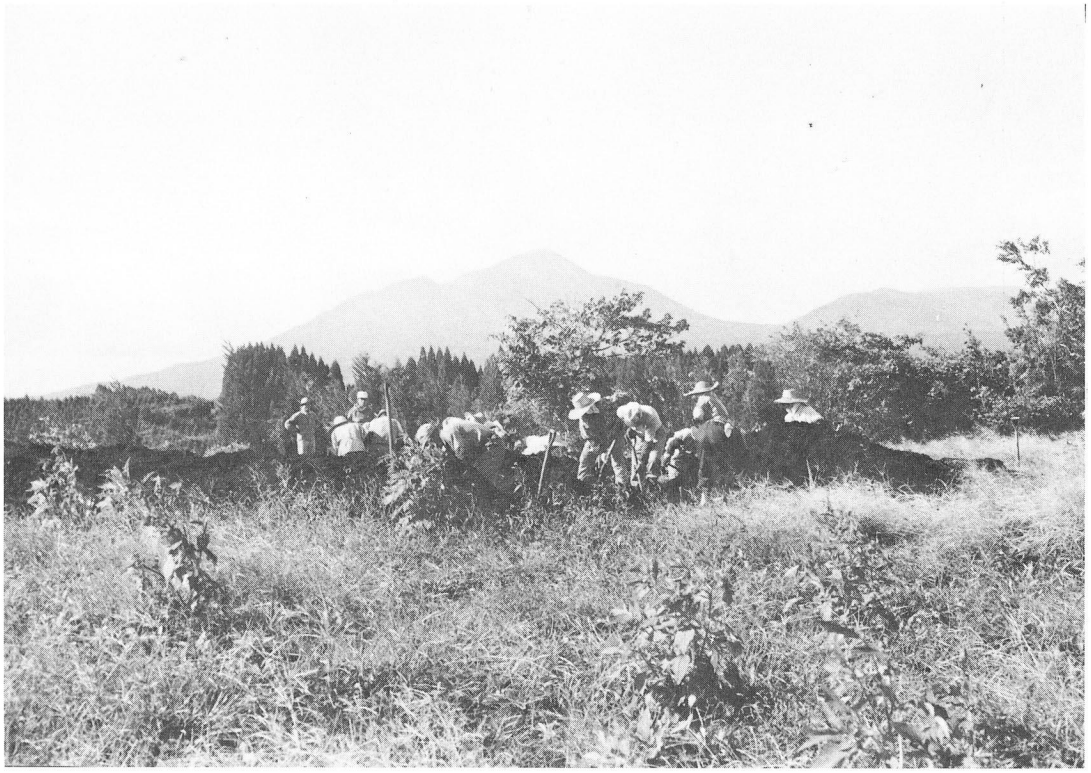
(4)



(5)

(1)～(3)　1号住居址出土石器
(4)、(5)　4号住居址出土石器

2号出土炭化種子



1号遺構

H地区発掘状景（東側）

瀬戸ノ口地区特殊農地保全
整備事業埋蔵文化財調査報告
―大　萩　遺　跡―
（2）

発　行　昭和51年3月31日
宮崎県教育委員会
編　集　宮崎県教育委員会文化課
印刷所　愛文社写真印刷